

信貴山縁起絵巻雑感

梶谷亮治

信貴山縁起絵巻（朝護孫子寺所蔵）の意義を理解するために本稿では、絵巻制作者（企画者）が意図して絵巻に埋め込んだメッセージをできるだけ発見認識することに努める。その際には詞章（詞書）や、命蓮自身の置文とされる『信貴山寺資財宝物帳』⁽¹⁾との関係をよく考えたい。

信貴山縁起絵巻は、登遐し切利天善法堂にある母穴穂部間人皇后のために釈迦としての聖徳太子が天上に至り説法するという、仏伝に做った物語をライトモチーフに、平安後期のある天子の奉為に、つくり物語化され描かれたものではないか、というのが筆者の推測であり出発点である。神仏と人間の物語が前後交流しつつ、しかし筋書き正しく展開するように思われ、できるだけこの構造と内容に迫りたい。また前稿（「信貴山縁起絵巻の信仰背景」⁽²⁾）ではふれなかった延喜加持巻を理解することでこの絵巻の企画制作者について考える。記述は、展開する絵に従い逐次課題をすくい上げるという方法をとる。記述煩瑣となることをおそれるが、ご海容を乞いたい。

飛倉巻 校倉の意味

米俵だけではなく、それを容れたままの校倉が飛ぶのは、他の類

似の説話にはない。その校倉に注目する。また徳人は山崎住人と認められているとして記述を進める。山崎は「大山崎町から島本町山崎、さらに旧水無瀬庄（広瀬・東大寺）あたりまでのかかなり広い範囲を指す場合があった」⁽³⁾。今、われわれが知る水無瀬庄絵図（正倉院宝物）⁽⁴⁾は、その山崎にある東大寺庄園の図である。水無瀬庄は山崎庄とも呼ばれた⁽⁵⁾。当庄は、天平勝宝八歳（七五六）の聖武天皇崩御直後に東大寺に勅施入され（それまでは天皇直轄）、それ以降所領関係が続く。絵巻中の信貴山寺にはこの水無瀬庄と東大寺との関係が反映されているとみたい⁽⁶⁾。

当面の校倉（稲倉）は、遅くとも六世紀から存在した三島県⁽⁷⁾に属する御倉（王権の及ぶ稲倉）と意義的に重なる。信仰的には天照大神の穀霊を宿す御倉である。校倉の信貴山寺飛来について、命蓮が「まことに怪しきことなれど、さ飛びて来にければ倉はえ返しとらせじ」というように、校倉は自身に意思があるかのように飛来した⁽⁸⁾。その意思の淵源は神話に語られている。

『古事記』によれば、伊邪那岐命が天照大神に「御頸珠」を贈与し高天原を知らしめさせた。またその御頸珠の名を御倉板拳之神と謂うとある⁽⁹⁾。御倉板拳之神とは、神聖な稲倉の中の棚に祀られた穀霊であり、天照大神を象徴する⁽¹⁰⁾。すなわち校倉は天照大神そのもの

であるという一面もそなえる。つまり、天照大神は自らの意志を示して、飛翔したとみられる。

絵巻には校倉が六図描かれるが、紙型使用と思われる同大表現であり、理念的には一貫した近接表現である。空中飛翔の場面⁽¹¹⁾、信貴山中の場面では遠近逆転表現となっている。すなわち命蓮の山房同様の遠近法の範疇にあり、神聖化された表現であることがわかる。

邸宅の景物 七月七日

飛倉巻には黄葉が配され、場は秋である。長者の邸宅にはその裏戸近くに瓜が植えられちようど実が成る(二場面)。室内にも果物が数種描かれる。女主人の居室内の棚厨子には、桃、梨子とみられる果実があり、その近くには絹織物らしき紅い裂が重ね置かれる。巻末の同じ居室では、棚厨子に瓜、堅魚と柘榴とみられるものがあり、傍らには巻首のとは色違いの青い裂がある。柘榴を別にすれば、これらはいずれも七月七日(乞巧奠)にかかわるものである。『江家次第⁽¹²⁾』や『雲凶抄⁽¹³⁾』によれば桃、梨子、瓜は乞巧奠の供物であり、『延喜式』によれば五色薄緋や堅魚も供物である。乞巧奠供物は本来は縁側や庭などに陳列されるはずだが、ここでは邸宅の景にあえて埋め込まれたと解して、飛倉巻の暦日は七月七日であるとみたい。なお、絵巻に見える大河は天上の天の川を想わせる表現かと考えたい。天照大神と七月七日が関連付けられているが、その理由は後文で述べる。

またもう一つ気がつくのが枕大刀である。『万葉集』歌が掛けられている可能性もあるかと思う。その歌は「枕大刀腰に取り佩きまか

なしき背ろがめき来む月の知らなく」(二〇―四四二三)で、思い人を待つ。信貴山縁起絵巻はその巻頭から、人と人との邂逅の物語だという意味を示そうとしているのではないかと思う。枕大刀もそのモチーフの一つとは考えられないだろうか。三巻を通して描かれる松、雁がね(待つ、遠つ人)もそうした意味を表すものだったと推測したい。

信貴山寺の情景(一)

信貴山寺の命蓮山房は、延喜加持巻前段のが少し小さく表されるのを除いて、ほぼ同大に描かれる。各々間の表現の違いと意味については後述する。その山房で命蓮は鉢を指差し、長者の従者らは⁽¹⁴⁾瀧をはさんでその奥に見える校倉を指差す。前述した命蓮のことばはここで発せられた。命蓮から見れば結果的には天照大神を「勧請」したことになる⁽¹⁵⁾。信貴山上に天照大神が鎮座したことの宗教的意味は大きく、後段の醍醐天皇加持を引き出す一因となるに違いなく、尼公巻での東大寺大仏の啓示とも同調的である。

次の校倉前場(米俵飛翔場面)の右に、山塊が崩え岩窟状(洞)となる所がある。この岩窟は信貴山が見立て雞足山⁽¹⁶⁾とされたときの迦葉の旁孔(『法顕伝』)にあたると思われる。大江匡房(一〇四一―一一一)の『江都督納言願文集』にも散見され⁽¹⁷⁾、迦葉修行の雞足山旁孔は平安文人に良く知られている。なお山上岩窟に籠居するのは迦葉の他に、天照大神や西王母の場合があることも留意される⁽¹⁸⁾。

次の校倉前の場面でも命蓮が頭陀行第一の迦葉尊者と重ねて描かれる。長者が驚いて注視するのは鉢の上の米俵ではなく命蓮の糞掃

衣の裾である。裸足の命蓮のその裾の破れが目立つ。迦葉尊者の見
苦しい裳の裾は『梁塵秘抄』に歌われるほどだった。⁽²⁰⁾

さて米俵は飛び立ち、その米俵を詞書は「雁などの続きたるやう
に」、「群雀などのやうにつづきて」と例える。鹿も驚き見上げるが、
その群鹿近くの松樹と黄葉樹、画面上方の松樹を見れば、それらは
おそらく連理樹である。高い空を飛翔する米俵は、詞書に言われる
とおりの雁や群雀であり比翼鳥である。であればこの場面は『長恨
歌』の一場面を想起させ、⁽²¹⁾つまり七月七日の出来事である。

延喜加持卷 八月十九日

この信仰的物語は実在の信貴山寺沙弥命蓮が醍醐天皇（八八五～
九三〇、在位八九七～九三〇）の瘡病治病加持にかかわったという歴
史的な事実と重なっていて、親身にまたつしみぶかく語られる。
歴史的事実と一定暗合しているという感覚が、飛倉・尼公巻とはニ
ュアンスの違うところで、延喜加持巻は、説話と現実を行き来する
微妙な感覚をもたらす。絵巻には歴史的事実の幾ばくかが反映して
いるはずである。

木村紀子氏は『古本説話集』の命蓮説話について、飛倉・尼公の
段と延喜加持の段とは別口に発している、と明言しておられる。⁽²²⁾す
なわち、『古本説話集』や信貴山縁起絵巻の命蓮説話は二系統の語り
口から成りたち、延喜加持段は、「禁裏の奥深く、帝の寝所にまで近
侍した語り」であるという。その語りを発した人物とは、延喜のみ
かど（醍醐天皇）の曾孫である宇治大納言源隆国と推測されたが、そ
の考察に導かれつつ、じつはさらに相応しい人物が存在するのでは

ないかと考えたい。

『信貴山寺資財宝物帳』によれば、承平二年（九三二）二月三日に
「左衛門督」が「山壹処」を信貴山寺に施入した。左衛門督とは、
藤原恒佐（八七九～九三八）である。⁽²³⁾また、承平五年（九三五）正月十
一日に大和国広瀬郡の土地伍段余を施入した「源右相君」とは、多
少問題は残るが源清蔭（八八四～九五〇）と考えたい。源清蔭は『公
卿補任』承平五年条に「参議 正四位下源清蔭 五十二年二月廿三日兼右衛
門督」とあり、源姓の相君（参議）は他にいないので、当人であると
する。おそらくこの二人が、『信貴山寺資財宝物帳』からみる限り、
命蓮の延喜加持に、宮廷側で直接かかわった人ではないか。『扶桑
略記』裏書によれば沙弥命蓮の加持祈祷は、延長八年（九三〇）八月
十九日のことであり、⁽²⁴⁾念のために『公卿補任』延長八年条をみれば、
「中納言 従三位同（藤原）恒佐 右衛門督。十二月十七日転左衛門
督」参議 正四位下同（源）清蔭 四十七大藏卿」とあって、この二人は
同時に在任している。

延喜加持巻はこの延長八年八月十九日の出来事を中心として構成
されている。絵のはじめ、勅使蔵人一行がくぐる門はおそらくは陽
明門で大内裏の東面側にあり、絵巻ではあえて逆勝手表現として門
前の空間を確保する。その広い空間の中に牛車と、召具二人が描か
れる。陽明門内の三人とあわせて五人が牛車召具とみられ、すなわ
ち車副一人（手綱近くの白張）、傘持・沓持二人（白張）、雨皮持一人
（狩衣）であり、沓を着け狩衣の人物は随行か、としておきたい。鈴
木敬三氏によればこの牛車は檳榔毛の車である。⁽²⁵⁾檳榔毛の車は四位
以上太上皇まで通用であるが、『蛙抄』⁽²⁶⁾によれば乗用の主人の身分に
よって車副の人数がこまかく分けられていた。なお、鼻銃を通した

手綱を牛の双角に八の字に巻き付け留めるのは、車副が一人の場合の作法かとも推測され、この場面の車副は手前の白張一人である。

車副が一人であると確認できれば、この牛車は中納言か宰相・散位の車輦である。延長八年時の中納言と宰相(参議)にはさきの藤原恒佐と源清蔭の名前があることが注意され、上位の恒佐の車であるとすれば、恒佐は今まさに参内中という状況を示している。

また場面の下方、陽明門を左からくぐろうとする僧一行は、上方の牛車の召具等とは互いに別集団とみえ、命蓮の加持祈祷とは関わりのないようだ。すなわちこれがすでに始行されていた毎月十八日の仁寿殿観音供にかかわる東寺僧一行であるかと想像がつく。

勅使蔵人の信貴山行と命蓮との交流の場面は後にふれるとして、清涼殿二場面のうちはじめの方は、信貴山寺から戻った使者の蔵人が、殿上広廂にかしこまりひかえる公卿らに、命蓮との話のなりゆきを報告する場面である。縫腋束帯姿(黒袍)は三位以上、例外的に四位の公卿の服装とされる。この二人の公卿は、使者の蔵人を通じて信貴山寺につよい関心を持っていたはずだから、先に見た『信貴山寺資財宝物帳』に記される藤原恒佐と源清蔭であろうとしたい。

なおこの時恒佐は従三位、清蔭は正四位下であるから服制に問題はない。また広廂南端見参板近くに坐す公卿は、さらに上位の公卿にしか許されない直衣姿である。直衣の著彩には銀泥が使用され高貴な印象を与えるが、この人物を「帝の近親者」と想定されたのは泉武夫氏である。筆者も同感で、藤原定方(八七三〜九三二)がこの場に最も相応しい人であると考えられる。定方は『公卿補任』延長八年条に「右大臣(従二位同(藤原)定方^{五十六}右大将。十二月十七日転左大将)」とあり、先の二人恒佐と清蔭の上役である。また定方は勸修寺

流藤原氏嫡流で、醍醐天皇母(贈皇太后)胤子の弟である(醍醐天皇の叔父)。醍醐天皇に近侍した。歌人としても知られ、恒佐とは近い縁戚にある。命蓮加持の直後には、比叡山にも天皇御惱平癒を祈らせた。この命蓮延喜加持は具体的には恒佐や清蔭が仕事をしたとしても、おそらくは定方の主導にしたがったものと考えたい。

清涼殿二回目の場面では、恒佐と思われる公卿が一人広廂にひかえる。定方はさらに奥、天皇の近くにあつて、天皇の「いかなる人にか」の声を聞き、御惱がたちまちに快方に向かう様子に立ちあつた人であるにちがいない。延喜加持巻の語り口が、「禁裏の奥深く、帝の寝所にまで近侍した」人のものというのがこの物語の設定とされるが、実際の延喜加持の事実が勸修寺流藤原氏の家系に伝えられ、絵巻企画の際につくり物語化された、と推測する。清涼殿場面に描かれる人物が特定の人に比定できることは重要である。この説話成立の淵源を示すことにはかならないからだ。延喜加持の実際を知るその家系後裔の人びとの、政治的アイデンティティーの源泉にもなり得るものであり、さらには宗教文化的な力の核にもなりうる重要な出来事だった。すなわちこの絵巻は勸修寺流藤原氏に深く関わる。

暦日の表現

さて、清涼殿二場面に共通して描かれ、問題視されてきたのが福山敏男氏が「仁寿殿の薨の西端」、鈴木敬三氏が「火炬屋」とされた屋根先端の突起状のものである。描かれる位置から判断して「火炬屋」が正しいと思われるが、それでは何故信貴山縁起絵巻のこの場面この位置に描かれたのか。この火炬屋は宮中での夜間の行事に臨

時に設置されたい。そこでこの清涼殿二場面が延長八年八月十九日の数日前から当日のこととすると、思いうかぶのは仁寿殿十八日観音供である。醍醐天皇御惱の緊迫した雰囲気の中、仁寿殿観音供も深更に及び修されたとみられる。やはり陽明門をくぐったのは、東寺僧であった。

ところで絵巻の清涼殿二場面のうちはじめの方には、落板敷の板の線に修正がある。二回目の清涼殿図はその修正後の図にしたがっている。緻密なこの絵巻に修正線があるのを疑問に感ずるが、この修正によって、清涼殿から左に張り出す紫宸殿西北廊の画面上の角度が少し立つ。その効果とえば、件の火炬屋の先端を画面の少し右側に移動させ、よりさりげなく見せることになる。なお、清涼殿と火炬屋との平面図上の位置関係は、『雲図抄』⁽³⁶⁾に見えていて、それと延喜加持巻の図(俯瞰図)と比較すれば、その位置関係が製図上よく一致している。さらに言えば、紫宸殿西北廊と火炬屋の平面図上の関係を維持したまま紫宸殿西北廊の角度を変えれば、火炬屋屋根先端の位置は絵巻縦幅方向にも変化する。火炬屋先端を絵巻画面の底辺に少し覗くほどのところにちょうど置くために、画家の綿密試行の末に得られた構図であるとみたい。すなわち火炬屋の先端を描くことによって十八日観音供を示したと解したい。

劍の護法の役割については松浦正昭氏の指摘が早い。⁽³⁷⁾『雑譬諭経』第三十六には、帝釈天が毘首羯磨に金輪を委ね、毘首羯磨が毘沙門天に、毘沙門天が飛行夜叉(劍の護法)に付し、飛行夜叉が国王に金輪を与え転輪聖王(金輪聖王)となす。飛行夜叉は寿命尽きるまで金輪聖王を守護するという説話が語られる。またこの説話のわが国受容については谷口耕生氏の論考がある。⁽³⁸⁾なお前稿でふれた『源

氏物語』北山ながし寺で金輪聖王となる源氏のストーリーも想起される。絵に戻れば清涼殿に現れた劍の護法が、河竹をしならせながら速度を落とす、その乗雲の生動感ある先端が天皇近傍の御簾几帳に静かに接近する様子である。本来は天界に住む劍の護法がこの娑婆世界と接点を持った瞬間の表現であり、信貴山縁起絵巻の全体のテーマと思われる神仏世界と現実世界との交流を明らかに示す象徴的な場面である。命蓮の加持祈祷に信貴山寺毘沙門天が靈応し、毘沙門天が劍の護法を醍醐天皇に遣わし、その結果醍醐天皇は金輪聖王となるというのが、この延喜加持巻の主張である。

次の場面は、時間的には少し遡る劍の護法飛翔の場面である。下界には田園風景が広がり、菜摘の女性の近くには、妻側に的を描く頭屋や、千木を上げる土地神を祀る神社などが描かれる。頭屋は社祭の世話役の家で、この光景はおそらく収穫を感謝する秋の社日(秋社)にちなんで描かれたものと思う。延長八年の秋社は八月十七日戊申である。⁽⁴⁰⁾絵は数日前の社日にちなんでいることがわかる。つまりこの絵巻はカレンダー的な表現もあわせて示していることが知られ、注意すべき情報である。

信貴山寺の情景(二)

ここで先に保留した勅使蔵人一行の場にもどる。陽明門前から一行九人が信貴山寺に向け大宮大路を南下する(画面上昇するのは天上世界に向かう如し)。蔵人が斜め後ろ、老堂童子らと大声の噂話に夢中になる従者の一人に一瞥を送る。ところでこの場面、上土の築垣に形の良い松樹がからむ。この松樹を信貴山寺の前触れとみたい。

『万葉集』に「岩屋戸に立てる松の木」(三一三〇九)の歌があるが、信貴山寺には「岩窟」があるので、この万葉歌を引用し絵に意味を付与した可能性があるのではないかと考えたい。⁽⁴¹⁾

これに続くのが勅使藏人一行が山中に入り命蓮山房に至る場面、山影に隠れつつ進行する様は、源氏物語絵巻関屋図(徳川美術館所蔵)の源氏山中行を想起させ、山容に層状の皴を重ねる皴法にも共通性がある。千野香織氏はその源流を高句麗壁画古墳舞踊塚、また正倉院宝物狩猟宴楽図捍撥絵に求められたが、この二例は共に遠近逆転の表現である。絵巻のこの場面もすでに異界・聖域であるという意味だろう。佐野みどり氏は「遠近のスケール逆転が神の領域の象徴的強意となっている」とされる。⁽⁴³⁾飛翔する剣の護法の飛雲の後方―雁が飛ぶ遠山(信貴山)は彼岸的表現であり、少し先の尼公巻巻末の三山形遠山は、信貴山寺が天であることを示すように思う。⁽⁴⁴⁾

こうした山水図のわが国における早い源流の一つに、前に言及した水無瀬庄絵図がある。図は水無瀬庄を取り囲む山容が山頂を内にして描かれ、あたかも聖域を取り囲むように連山が描かれる。山際や稜線に沿って遠樹が描かれるが、一樣な遠山表現であって山容自体には遠近表現がない。この水無瀬庄絵図が信貴山縁起絵巻の山容表現に影響を与えたのではないかとさえ思わきわめて特異な印象深い図様である。その山容に囲まれた田畠が聖皇聖武天皇に属した聖域である。中に聖域(神域)があり周辺に遠山がめぐるといった概念は、やはり信貴山寺の表現に通じるのではないだろうか。この水無瀬庄絵図は、久安三年(一一四七)に勸修寺法務寛信(一一〇八五―一一五三)が東大寺別当となったときに、印藏の文書公驗絵図類を修補している⁽⁴⁵⁾ので、その際に寛信とその周辺によって寓目記憶された可能

性があることを特記したい。こうした山水図観は平安後期庄園図にも受容されたとみられ、近くでは康治二年(一一四三)の紀伊国神野真国庄園図(神護寺所蔵)、嘉応元年(一一六九)の備中国足守庄園図(神護寺所蔵)が知られる。しかしやはり関屋図の、逢坂関での空蟬と源氏一行の邂逅の場を近景としほぼ三方を山容で囲む構図が、反転すれば信貴山図の構成に近く、その時代の近さがよくうかがわれる。さて、勅使藏人一行の二回目の信貴山行は、秋草の野からはじまる。竜胆、尾花、女郎花を描く。単に秋の情景と見ることもできるが、ほかならぬ定方に「秋ならで逢ふことかたきをみなへし天の河原に生ひぬものゆへ」(『古今集』一三三番)がある。一行の左方には連理樹にも見える寄り添う松樹がある。これらは七月七日の校倉飛翔(天照大神勧請)が延喜加持とも無関係ではないことを示唆するように思う。次の場面は命蓮山房である。ここで命蓮が褒賞を拒むのは頭陀行の沙弥という命蓮のアイデンティティーの表現であると思う。詞書に「里へ出づることもなき聖」とあり、飛倉巻で示された鶏足山迦葉尊者が想定される。命蓮山房中、命蓮の背後に法華経八巻と思われる経巻が見え、勅使従者が指差すのはその経巻である。竹村信治氏にこの法華経八巻に注目した「絵語り」の考察がある。⁽⁴⁶⁾

「絵語り」とは詞章による語りの補完的な意味を持つものとして理解しておきたい。『信貴山寺資財宝物帳』にも法華経の存在が記されるが、命蓮が法華経行者として知られた存在であることは、命蓮とほぼ同時代資料の『僧妙達蘇生注記』⁽⁴⁷⁾の記述からも明らかであって、平安後期の絵巻制作当事者にとっても周知のことであつたに違いない。

さて、ここではじめて命蓮山房が岩塊上の懸崖造として表される。

図は尼公巻の第二図と全く同図（主要部の線描が重なる）である。ただし見える範囲の広さの差はある。また尼公巻では閼伽棚も加える。その表現の違いについては後述する。ここでも場面に意味が重ねて込められ、後段の伏線とされていると思う。

尼公巻

尼公巻の巻頭部の詞書は、信濃国に住む姉尼公が弟命蓮をたずねて、まずは命蓮が受戒したという東大寺あたりに行こうと出立した、という事情を述べる。この間の詞書は五行から六行ほどのわずかなものだが、絵は急流に沿う木曾路と思われる場面（第三紙～第五紙半ば）と、歌枕にしたがった園原布施屋と思われる図（第五紙半ば～第八紙半ば）の二図を、五紙半をついやして描いている。詞書からは押さえられない、いわば別の原理に従って絵が描かれているように思う。

次に続く詞書は、山階寺、東大寺の辺りを尋ね歩く尼公の情愛こもる声が聞こえてきそうな、心配もあるが心地好い書きぶりのもので、約八行分ある。絵はすでに奈良に近いと思われる集落の入口辺りで老翁の一家らしき人らと話す尼公の場面（第八紙半ば～第九紙）と、民家たたきの土間のその土台に坐した尼公が、和やかな表情で市井の人らとまじわる場面（第十紙～第十二紙半ば）の二図を、ほぼ四紙分に描いている。⁽⁴⁸⁾ 詞書にはさすがに「いかにせむ、これが有様聞きてこそ帰りも下らめ」とやや深刻な様子も語られるが、絵はあくまで和やかである。前の二図と比較すれば絵は詞書に密接しているとみられるが、そこには詞書から知られる情報よりも多くのもの

が埋め込まれ、その埋め込まれたものの意味から和やかさがにじみ出るように表されたと考えたい。

信濃路（木曾路） 九月九日

尼公は信濃国の人である。信濃から奈良に行こうとすると天竜川沿いに伊那谷を通る古い道もあるが、ここでは木曾川の急流に沿って開発された『万葉集』に「信濃路は今の壘り道刈りばねに足踏ましなむ杵はけ我が背」（十四―三三九）とある木曾路を通ることに意義がある。木曾路は和銅六年（七三三）七月七日に開鑿された（『続日本紀』）。絵巻は七月七日を描くわけではないが、その暦日を想起させるために歌枕にもある木曾棧道を描いた、と思う。

すでに検討したように、飛倉巻では七月七日の出来事が描かれ、延喜加持巻では八月十九日前後の暦日が押さえられる。また後文で指摘するように、尼公巻の半ば、尼公が集落の人びとと交流し東大寺に至る場面（第八紙半ば～第十五紙）には、正月七日、三月三日、五月五日の出来事が描かれている。延喜加持巻を勧修寺流藤原氏の主張を含むつくり物語、そのほかを一続きの説話的な物語とすると、飛倉巻と尼公巻はすべて節供日⁽⁴⁹⁾にあて表現されたと考えられる。そこで再び尼公巻巻頭の図（第三紙～第五紙半ば）を見れば、そこに描かれるのは七月七日（飛倉巻）のつぎの節供である九月九日（重陽）である⁽⁵⁰⁾とみたい。

重陽の光景とみるのは、尼公一行の対岸にある切り立つ岩塊上に、赤い実をつける樹木が描かれるからである。その樹木を茱萸とみたい。九月九日には「茱萸の実の房を頭髻に挿し、悪気を辟除し、而

して初寒を禦ぐ」と『陽羨風土記』にある由。⁽⁵⁰⁾わが国でも寛平五年（八九二）宇多天皇の重陽宴では、茱萸が詩題とされた。⁽⁵¹⁾王維に著名な「九月九日憶山東兄弟」や「茱萸泝」がある。王維詩は「わが平安朝の歌人たちもきつと読んでいたに違いない」（小川環樹氏）⁽⁵²⁾。茱萸泝は王維別墅輞川莊の急流にあつたらしく、峨々たる岩塊に飛瀑急流を描くのは、いかにも唐宋風の山水表現である。⁽⁵³⁾漢詩由来の山水風景である可能性もあると思う。

牝馬之貞

尼公の乗る黒駒は、信濃望月の駒と考えても良い。また馬にこと寄せて男女の邂逅を予見させるものかとも思う（『万葉集』七一―七二）。馬に乗る尼公の両手（手袋の）甲には黄葉様の文様が描いてある。目指すべき方角が黄葉の竜田（すなわち西南・未申）であるという意味か。この時点で、すでに尼公の往くべき場所方角が示されていると解される。その上、詞書には、「ひつじさる」が三度あらわれる（『古本説話集』も考慮）。これは「物語の展開の上での重要句であり」、⁽⁵⁴⁾単に方角を表す機能だけを持った語詞とは思われない。未申は八卦の坤と密接な関係にある。方角を表す未申は方角を表す坤と同義だが、坤はまた八卦（六十四卦）の一つであつて、『易経』上の多くの意味を担う。絵巻では未申が『易経』の坤を導き出していると考えたい。

すなわち、手の甲に竜田（未申）を表す尼公は坤の象徴となる。『易経』六十四卦の坤は、卦辭に「坤は、元いに亨る。牝馬の貞に利ろし。君子往くとくあるに、（中略）西南には朋を得、東北には

朋を喪うに利ろし。貞に安んずれば吉なり」とある。⁽⁵⁵⁾彖伝にはこれを解説して、牝馬の脚力のすこやかさを云い、牝馬のような従順利貞の徳こそは、君子たる者の行動の範とすべきとあり、また西南は陰の方位であつてそこには牝馬の徳をもつて至るべきである、とある。尼公は西南方角に往くべき人であり、往くには牝馬を用いるのが相応しい。絵から見てもこの黒駒を牝馬とするのに違和感はない。ここに、信貴山縁起絵巻と『易経』の接点が示されているとみたい。

園原布施屋 十一月中冬至

つぎの場面（第五紙半ば〜第八紙半ば）は、歌枕園原布施屋とされる図である。⁽⁵⁶⁾坂上是則の「園原やふせ屋におふる帚木のありとは見えてあはぬ君かな」（『新古今集』九九七、『古今六帖』三〇一九）を踏まえる。「帚木」は「信濃なる園原にこそあらねども我は、き木といまはたのまん」（『後拾遺和歌集』一一二七、平正家）とあるように「母」を連想させる。これは前の坤の象である母とも一致して、尼公に母を見ることも可能である。この母のイメージはさらに「国母」のイメージにまで至る。『栄花物語』駒競べの行幸に「大后の宮（彰子）、天の下に三笠山と戴かれ給ひ、日の本には、帚木と立ち栄えおはしましてより」⁽⁵⁷⁾とあり、帚木が国母藤原彰子に喩えられている。

さてこの場面の暦日であるが、ここは二十四節気十一月中冬至であるとみたい。門の柳樹が枯れ果てていかにも寒々とした冬景である。この冬至もまた節供日である。⁽⁵⁸⁾『宋書』によると、「冬至の朝賀享祀は、皆な元日の儀の如し。又た履襪を進む」（『初学記』卷四所

引)とあるが、⁽⁵⁹⁾尼公が毛沓を脱ぐしぐさをするのはこの冬至の「履襪を進む」にちなみ、履き物を新に替える表現とみる。従者が指差し示すのは、冬至の日没方向である西南方角だろう。つぎに尼公の後背の須弥壇と礼盤は、西(絵巻画面の左上を「西」とみる)を背に東を向いて描かれており、そこに祀られる尊像は阿弥陀如来像に相違ない。画中には信濃梨も描かれていて、阿弥陀如来は信濃国善光寺本尊を暗示する。この場面は尼公と善光寺本師阿弥陀如来との近い関係を示した場面とみられ、尼公の意味と位置付けを考えるとときにきわめて重要である。

阿弥陀如来を祀るべき毎月十五日はここでは十一月十五日で、冬至に近い。若い男女が運ぶ灯明と火鉢(香爐)は阿弥陀仏供養のためとみられる。

また仏堂の縁に置かれる米俵は、新嘗を示すように思われる。新嘗(祭)は天照大神の重要な祭祀として⁽⁶⁰⁾記紀に見え、飛鳥時代以降には十一月卯日に行われた。

なお、左下のつつみ井の水があふれるのは、二十四節気冬至に配される七十二候の「水泉動」にあたりとみたい。以上のようにこの場面を十一月中冬至とみて誤りはないと思う。

人日 正月七日

一つながりの集落場面のその前半部分(第八紙半ば〜第十紙半ば)を見る。集落入口の小祠は逆勝手に描かれその左に広場を作る。この空間には七人の人たちが描かれていてぎやかだが、左方の民家の入口に立つ小児がほほ裸に近い姿で箸とお椀を持つのに注目した

い。次の場面は三月三日とみられるからここはそれより遡るはずで、人日正月七日とみて、童子が左手に持つのは(見せているのは)人日の七種粥であろう。小南一郎氏によると、人日は西王母ともかわる重要日で、穀物の豊作を予祝する日である。⁽⁶²⁾また西王母に由来する「華勝」を作り贈り物にするという。ここではさすがに華勝らしきは見当たらないが、正倉院宝物の「人勝」⁽⁶³⁾に裸の童子が描かれることから推測すれば、画家がこれを知っておりあえて童子を描き加えたかと想像したい。醍醐天皇の時代には人日七種粥は確認でき『枕草子』にもふれられる由で、平安後期には良く知られた節供であったとみられるが、⁽⁶⁴⁾ここでは中国における原義をも想像させる描きぶりかとみておきたい。なお、正月七日節供はその半年後の七月七日節供と織女三星や西王母を介在に関係付けられているという。⁽⁶⁵⁾

さて尼公、尼公の従者、村の老翁は三人ともに杖を持ちながら和やかな雰囲気話している。三人が杖を持つのは正月上卯日の「卯杖」にちなむと推測したい。⁽⁶⁶⁾尼公は命蓮の行方を尋ねる様子だが、その手の甲にある黄葉文様は、目指すべき方角が西南であるとすでに示している(前述)。また尼公とその従者の着衣をよく見れば、尼公上衣の襟元から両前腕に続く細い衣文線のパターンや、従者の左手上の腕組みから腹前に引かれた衣文線とそれに続く杖の描線が、ともに「羊」字に見えてしかたがない(後者は小篆)。もし「羊」であれば、それは当人(主人尼公)の生氣方が坤であることを示している、これも西南である。⁽⁶⁷⁾

なお、この場面は陰陽和合の隠喩であるとされる。⁽⁶⁸⁾論者の言われる「陰陽和合」とは意味が異なるかも知れないが、筆者は、陰陽のとらえ方(『易経』の考え方)が尼公巻に 응용されていると思うので、

後段において少しふれたい。なお問題の老翁後背の異形石は正倉院宝物に散見の形状で、人勝同様、画家の古代絵画研究の跡がみえる所である。この異形石は、老翁がじつは仙人であると示す記号とみて、つまり信貴山寺千手観音の眷属婆藪仙の姿を見せたかと解したい。なお老翁が持す蒲葵扇は醍醐寺修験峰入の折の持ち物に酷似する由、鈴木敬三氏が指摘しておられる。⁽⁶⁹⁾ また何気なく描かれる小祠前の赤い丸石は、おそらく宝珠を意味し、後に明らかになるように天照大神を象徴する。

水汲みと洗濯

次に進むと(第十紙)、大路沿いの水汲み場と洗濯場に女性が二人、奥の畠に菜摘みの女性一人がいる。千野香織氏は、この場面を『法華経』提婆品反映の場面とされ、亀井若菜氏は行基歌「法華経を我が得し事はたき木こり菜摘み水汲み仕へてぞ得し」(『拾遺和歌集』一三四六)に言及し、その説を支持補強された。⁽⁷⁰⁾ 「菜摘み」を取り込んだ行基歌は、絵巻のこの場面によく合致するので、筆者も同意したい。この歌謡は、『三宝絵』法宝一八(大安寺栄好段)に初出し法華八講五巻日の歌として広く知られていた。

洗濯場面の意味であるが、一つに「上巳の禊」がある。小南一郎氏によれば、『続漢書』(後漢書礼儀志上)に、「三月上巳に東の流水のほとりて禊をする。これを洗濯という」とある。⁽⁷¹⁾ 「洗濯」の語は長元八年(一〇三五)文書に確認できるから、⁽⁷²⁾ 信貴山縁起絵巻の時代に三月上巳(以下三月上巳を三月三日と記す)に洗濯を掛けることはでき。次には、『万葉集』の洗濯を詠う歌「洗い衣取替川の川淀の淀ま

む心思ひかねつも」(十二・三〇一九)に注目する。取替川を大和富雄川と解し、⁽⁷³⁾ 『拾遺和歌集』の「いかるがやとみのを河のたえばこそ我が大君の御名をわすれぬ」(二三五一歌)の聖徳太子・片岡山飢人譚に思いが至れば、前の行基歌にも結びついて(行基にも片岡山飢人譚に関わる聖徳太子信仰があるので)、後段の東大寺場面を導く伏線にもなり得ると思う。

桃花 三月三日

この大路沿いには寄生木ある松樹老木二株があり、それに接して桃樹三株もある。⁽⁷⁴⁾ この桃樹によって季節が明らかにわかる。晩春である。「三月」三日三千年に生るてふ桃の今年より花咲春になりぞしにける 忠岑(『古今和歌六帖』五八)とある和歌があり、⁽⁷⁵⁾ 『落窪物語』の屏風歌にも、「三月三日、桃の花咲きたるを人をれり」の詞書で「三千とせになるてふ桃の花ざかりをりてかささん君がたぐひに」と歌詠がある。⁽⁷⁶⁾ 桃花は三月三日に関連付けられていることが了解される。また、「ははこ摘む弥生の月になりぬればひらけぬらしな我が宿の桃」(好忠集・六三)とも詠われ、桃のある畠で摘まれる菜は母子草(御形)であり、それは同日の母子餅のための菜であるから、絵巻に描かれたこの日は三月三日節供に設定されていることが明確にわかる。この設定は尼公と集落の人たちとの交流をはさんで、家並の終わりの部分(第十二紙半ば)まで同様であるとみられる。

さて便宜話をさきに進めると、この集落が過ぎて次の場面(第十二紙後半、第十三紙)は、「木々は緑の盛りで、もはや夏」⁽⁷⁷⁾ であり、すなわち季節は新緑の初夏四月であろうか。山道は五月雨のはしりに

ぬかるんでいるようにも見える。つづいて現れる大仏殿図（第十四紙〔第十六紙初め〕）には、仏殿中に尼公が参籠する印象的な場面が描かれる。詳細は後にゆずるとして、ここではこの尼公が大仏殿裡に何の躊躇もなく入り、大仏と会話をする意味を考えたい。阿部泰郎氏は「仏神と人との神秘的な交信の回路が開かれる、特別な時空の中の出来事⁽⁷⁸⁾」と解しておられる。そこで想起されるのは、信貴山縁起絵巻が成立する以前の嘉承元年（一一〇六）に、『東大寺要録』が成っていることである⁽⁷⁹⁾。その『東大寺要録』には「大神宮禰宜延平日記」を引いて、東大寺大仏と天照大神との習合が明記される⁽⁸⁰⁾。すなわち「毘盧遮那仏（大仏）〓大日如来と天照大神の習合が確認される⁽⁸¹⁾」。この大仏と天照大神の習合が、絵巻大仏殿のシーンに反映している⁽⁸²⁾とみたい。大仏殿シーンの尼公は、天照大神の聖霊を可視化したものではないだろうか。大仏は月輪中に描かれるように見え、これは本地仏鏡像の姿に近い。すなわち本地垂迹の図像化である。

尼公と天照大神との関係を確認した上でもとの場面である三月三日（第十紙、第十一紙）に返ると、三月三日は先蚕儀礼の日でもあることが注意される⁽⁸³⁾。先蚕儀礼は時の皇后が主催することも注意しておいて良い。尼公が土間先に坐るその和やかな姿に何か話しかけるのは、青色染糸を繰る女性である。染糸はおそらく絹であり、この家は養蚕を家業（唐猫はその守り）とした農家だろう。一方、天照大神が蚕神でもあることは記紀から明らかである⁽⁸⁴⁾。この場面は、蚕神・機織神たる天照大神（尼公の姿をした天照大神）の一面があらわされているとみたい。

次に桃樹について再度考える。桃は西王母と強く結びつく。三月三日の桃が西王母の連想を生むことは前記した。小南一郎氏による

と、三千年の桃は、西王母が漢武帝に与えたもので、『博物志』や『漢武故事』（魏晉南北朝に成立）に云う、七月七日夜（七夕）に紫雲の車で漢武帝を訪れた西王母の物語にしたがっている⁽⁸⁵⁾。西王母は漢武御殿の西側に到着し、南面東向に坐り、武帝は東面西向きに坐る。西王母は持参の桃を漢武と分けて食べる。この桃は三千年に一度しか実が成らないという。王権護持ともとれる物語である。ちなみに、仁海（九五―一〇四六）の『小野六帖』にもこの物語の梗概が載せられ、真言宗小野流にも受容されたことが知られる。結局、三千年の桃は三月三日に掛けられながら、七月七日七夕をも指し示す。西王母・漢武帝譚が七夕譚に近づく。わが国では藤原房前（六八一―七三七）の七夕詩（『懷風藻』⁽⁸⁷⁾）や大江以言（九五五―一〇一〇）の七夕詩序⁽⁸⁸⁾に西王母のイメージが現れる。また、そもそも西王母は頭冠に「勝」を着け、その「勝」とは「機」を示すから、西王母と織女とは本来近い⁽⁸⁹⁾。なお絵巻に返ればこの場面、三株目の桃樹にはその奥に朝顔が隠されていて（桃樹に重なって描かれる）、朝顔の漢名は「牽牛子⁽⁹⁰⁾」だから、やはり強く七夕をも指し示す場面であることがわかる。

一方天照大神はといえば前記のごとく機織神である。さらに『万葉集』によつてみると、高天原安の川と天の川（天漢）とが習合しており、したがって天照大神は七夕織女神と習合視されていたかと思われる⁽⁹¹⁾。三月三日の場面で、尼公と桃樹が隣接し描かれるのは、桃樹が西王母・織女を象徴し、一方尼公（天照大神）が蚕神・機織神であると考えられたからだろう。結局、天照大神は七夕とも強い関係にあるということが信貴山縁起絵巻のメッセージの一つだと思ふ。この結論が校倉が七月七日に飛翔する理由である。

陶淵明 『桃花源詩并記』

『万葉集』に、天平十九年（七四七）、大伴池主が「晩春三日の遊覧」を詠う七言詩がある（十七―七言晩春遊覧）。三月上巳の日、桃花頬を照らし光和らぐ春の雰囲気の中で、陶淵明『桃花源詩』を導き出しつつ詠う⁹²。絵巻の桃花咲く場面や尼公のおだやかな表情は、この万葉歌を想い浮かべさせる。さらに伊藤大輔氏が指摘されるように、この場面（第八紙―第十二紙半ば）には、たしかに『桃花源詩并記』⁹³が反映しているとみられる。すなわち、「『桃花源詩并記』には桃花、良田、桑竹、鶏犬などの字句が現れるが、絵巻には桃、島、竹、犬などのモチーフが描き込まれている⁹⁴」。この他にも、『桃花源詩』にみえる春蚕、童孺、斑白も画中にある。『桃花源詩』の詩句には、ほかに「春蚕収長絲 秋熟靡王税」ともある。春蚕に対応する秋熟（種）は、描かれてはいないが尼公（天照大神）の穀霊がこれを象徴する。筆者も、この場面と『桃花源詩』とが密接な関係にあると考へたい。天照大神でもある尼公が村落中に身近に描かれるという、まさに和光同塵の神仙境とみられる。

『桃花源詩』からさらに情報が得られないか。そこで詩中の四句「草葉識節和 木衰知風厲 雖無紀歷志 四時自成歳」（草の葉で節の和するを識り 木の衰えて風の厲たきを知る 紀歴の志無しと雖も 四時、自のずから歳を成す⁹⁵）に注目したい。一海氏注によると、この部分、『論語』陽貨篇に「天何言哉 四時行焉 百物生焉 天何言哉」とあるのと関連している。四季の変遷は形而上的である。『桃花源詩』に詠われる内容は、さらに遡る古典にも淵源する深遠な意味を

含むと思われる。

東大寺へ

尼公に吠えかかるのは織女に有縁の犬（徳興里古墳例）かも知れないが、ここでは万葉歌に「我が待つ君を犬な吠えそね」（三―三二―七八）とあるのを想像したい。別の「相見ては千歳や去ぬる否をかも我や然思ふ君待ちがてに」（一四―三四七〇）は、人を待ちかねる歌に犬（伊奴去ぬ）をひそませたか、などと想像する。さらに左の男性は「犬飼」であり、犬飼星とみれば牽牛である⁹⁶。姉尼公をはさんで近傍に牽牛子が隠れ描かれてもいるので、ここでも犬と犬飼で七夕を暗示するかもしれない、そのような想像を誘う場面である。いったい信貴山縁起絵巻の絵はきわめて雄弁である。絵が歌をさそい、物語を語らせ、鑑賞者自身と絵とのユニークな関係を作り上げる。次に、この家並の連なりにある竹を「さす竹」とみて、万葉歌の「さす竹の大宮人の家と住む佐保の山をば思ふやも君」（六一九五―五）を想起してみたい。佐保の山が東大寺を象徴するとみれば、この竹はつぎの東大寺の場面を引き出すことになる。じつは前述したように、東大寺を示す伏線はすでに設定されている。村落大路の松樹・桃花、菜摘み水汲み、さらに洗濯の場面は、聖徳太子と行基を導き出し、『日本霊異記』⁹⁷を介して、この二人が東大寺へとイメージを繋げていた。周到な準備だと思う。

大仏殿 (一)

尼公が奈良坂を超えると、東大寺である。尼公は左上がりの坂道を上り、神域へと入る。遠近逆転表現があり、ここはすでに異界である。つきには圧倒的な姿の大仏殿が描かれる。

大仏殿は、左右からの斜投象の合成で正面観に表され、その俯瞰の角度は絵巻中最も小さい。ちなみに当麻曼荼羅と比較してみれば、俯瞰角度はより小さく(緩い)、斜投象角度はかなり強い(角度が立つ⁽⁹⁸⁾)。ところで大仏殿図は、治承四年(一一八〇)兵火焼失以前の姿、すなわち天平創建の大仏殿の姿を伝えるとされてきた。「天平の大仏殿は桁行七間、梁行三間の母屋の周囲に庇をめぐらし、さらに裳階を加えたもので、柱間は『七大寺巡礼私記』に正面中央三〇尺、左右二九尺(二間)、二六尺、二三尺(二間)⁽⁹⁹⁾」である。これに従えば、大仏殿図の扉部分が母屋の桁行に対応し、白壁の二間が庇と裳階に対応することがわかる。絵巻にみえる柱間隔は、『七大寺巡礼私記』の記録と比例的に良く合う。

ただ、柱間隔と密接に関係する扉口の大きさについて福山敏男氏は、「内法の幅は約二四尺、高さは三六尺」と推測しておられるが⁽¹⁰⁰⁾、絵巻の扉口高はそれよりかなり高い(七六尺程か)。筆者はこの差異は絵巻の表現意図に起因すると考えたい。絵巻は、普通であれば見通せないはずの大仏殿の奥まで表そうとして、俯瞰角度を小さくしながら扉口を高く上げ、同時に斜投象角度をも調整したのではないか。高さのある大仏の姿を全姿描き、左脇侍如意輪観音と、大仏殿庇に隠れる毘沙門天の姿をも同時に表す必要があったからである。

大仏正面から右に五間目、白壁の向こう側、殿内平面の庇(二間通り)の手前と奥に、持国天と毘沙門天が安置されていた。この内毘沙門天像のみが見えるのは、奥すほまりとなる左右からの斜投象の結果である。斜投象の角度は大仏殿正面の石階五連の描写に明示されている。画家は俯瞰角度を小さくすることによる奥行表現効果とそれに連動して斜投象図法による右奥画像現出の面白味を熟知していて大仏殿図に援用している。この場合、大仏正面から右に五本目の柱(ほぼ霞で隠れている)の礎石辺りから左上方向に斜投象同角度で補助線を引けば、まさに毘沙門天がこの庇の奥にあるが故に絵巻上(上方)に現れる(持国天は隠れたまま)。しかも四間目の中程に坐す如意輪観音と、絵巻上の場所を合理的に分けあうことができる。

ここは綿密な思考を経て製図方法が決められたはずで、画家の工学的センスを尊敬すべきである。結局、実際の大仏殿の扉口寸法(高さ)を改変し、俯瞰角度・斜投象角度を算出製図しつつ、毘盧遮那仏(大仏)、如意輪観音、毘沙門天を三尊そろって表す必要があったのであり、それは信貴山寺の信仰との関連を除いては考えがたい⁽¹⁰¹⁾。

ここで絵巻に目をもどすと、大仏殿中の白石座が実際よりも直径小にあらわされ、全体が月輪中にあるように見せるのは、白蓮華座上大日如来(大日経)に寄せた表現であり、これも斜投象図法による縮小効果を用いるか。また光背には、『七大寺巡礼私記』の記述とは異なり、飛雲上来迎の仏が描かれる。これに浄土図との近縁を想定することも可能だろう。このように大仏殿図は、実際の大仏殿をモデルに、俯瞰角度を低くし特には扉高には改変を施しており、そのようにしながら斜投象図法によって、必須のものを必須の位置に表したというように理解できる。ただ、福山敏男氏も言われるよう

に、大仏殿に取り付く石階は、「正面では中央間（二間または三間幅）と左右両端間から数えて第三間に」あり、絵巻の表現は誤りである由。しかしこういふ所は尼公の足元を考えた上での工夫と見るべきだろうと思う。虚実混淆である。

大仏殿（二）

大仏は盧舎那仏（毘盧遮那仏）であり、これが平安後期には大日如来とみなされているが、この大仏殿のシーンは、大仏（大日如来）と天照大神の同体説を前提とした上で、尼公を天照大神と重層させて見ることによってはじめて、大仏（大日如来）・天照大神同体説の視覚的表現であることが理解できる。絵巻作者は、この場面で尼公と天照大神の一致を表現したのである。

この場面の意味について、齋木涼子氏にしたがって少し詳しく見ると、ちょうど『東大寺要録』の成立した頃に東大寺別当であった醍醐寺僧勝覚（一〇五八―一一二九、別当在任一一〇四―一七）が、神仏信仰上の貴重な資料を残している。勝覚の『伝受記』（永久三年（一一一五）成立）には、

（前略）次相承秘口云、以聖観音、習合日天子真陀摩尼尊事、宗之大事也。摩尼尊者、如意輪也。（中略）大師既指日月輪、尺宝玉。々々即如意輪也、々々々者、通諸観音。為宝部主故也。（中略）日輪即天照大神大日宮ナリ。々々々・内侍所・天照尊、同体異名也。天照尊者、日天子也。本地大日如来。々々々々々者、日月輪也（中略）内侍所即日天子、々々々即国主也。国者日天子御子孫也。彼是一体無二也（下略）。

などである。

難解であるがその大要は、聖観音が日天子（真陀摩尼尊）と習合するとみえることは、宗の大事である。摩尼尊（宝珠尊）とは如意輪（観音）である。（中略）弘法大師は日月輪は宝珠と積している。宝珠とは如意輪（観音）である。如意輪は、諸観音を通じ宝部の主であるからである。（中略）日輪は天照大神（日天子）であり、その本地は大日如来、大日如来は日月輪である、などとあり、さらに「大日如来・観音・日天子・天照大神・内侍所神鏡・天子（天皇、転輪聖王）を重層的に結びつける」と大概を解釈できよう。キーワードは宝珠である。なお、宝珠は転輪聖王七宝の重要な要素であり、ここでもつとも重視されていることも留意すべきである。

天照大神と大日如来の習合は、『東大寺要録』を経てこの『伝受記』成立期にはすでに確定的と考えられるが、その前段に言及される如意輪観音もこの概念の重要な部分を占める。じつは天照大神と観音との習合は、十一世紀はじめまで遡る。

大江匡房の『江談抄』巻一の三五に、
又問云、「熊野三所本縁如何」。被答云、「熊野三所伊勢太神宮御身云々。本宮并新宮大神宮也。那智荒祭。又太神宮救世観音御変身云々。此事民部卿俊明所被談也」云々。

とある。源俊明（一〇四四―一一一四）が醍醐源氏（隆国息）であり、醍醐法務定賢の弟であることは注意しておくべきか。この説話は、『明文抄』五にあるように、長保二年（一〇〇〇）（大神宮）遷宮の折、右府武田種明に、内宮が救世観音である夢告を得てその利生を得た説話があり（寛弘三年（一〇〇六）二月廿日に記録された）、大江匡房は源俊明を通してこれを知ることになった、とされる。

看過できないのはここに「救世観音」と明記されることで、「救世観音」が聖徳太子の謂であることは十分に意識されていたように思う。筆者はこの説話は聖徳太子と天照大神の習合を明らかにしたものと解する。十一世紀は『四天王寺御手印縁起』（寛弘四年（一〇〇七）、四天王寺所蔵）が出現し、藤原道長などの貴族が四天王寺・法隆寺に参詣し、法隆寺、磯長廟などで聖徳太子信仰が喧伝される時代である。

十二世紀第二四半期に成立したとみられる東寺真言宗の要録である『東要記』⁽¹¹³⁾に、

神仙記云。聖徳太子は大師前身也云々。先徳伝云。聖徳太子は救世観音也。此菩薩本是金銅之法形菩薩也。後更鑄造宝冠戴其首。此菩薩趺在銘。号如意輪観音。爰知大師本地如意輪観音歟。

と記される。救世観音は聖徳太子であると明記し、四天王寺金堂の金銅救世観音像の足下銘記「如意輪」を根拠に、救世観音は如意輪観音にほかならないとされていることが解る。従って『東要記』成立の時代以降は、東寺・醍醐寺・勸修寺や、東南院を通じて交流の深い東大寺では、天照大神・大日如来の習合の意味中に、聖徳太子の心象像が含まれることになると思う。聖徳太子像を見過ごしてはならない、と思う。

絵巻大仏殿の場面は、前に大仏（大日如来）と天照大神との習合を表現すると解釈したが、ここでは以上の考察を踏まえて、さらに聖徳太子との習合も前提にすべき事になる。また大仏殿のシーンで毘沙門天が表されることについては、信貴山寺での信仰との対称的な関係を考えたが、この大仏殿の情景が覺鑊の『多聞天講式』『五輪九字明秘密釈』などとも関連するのではないかとあらためて指摘した

⁽¹¹⁴⁾い。毘沙門天と聖徳太子信仰との関連は、法隆寺で成立した勝鬘經講讀図理解を通して別稿で考えた⁽¹¹⁵⁾。なお、別の視点から皆金色の大仏表現と聖徳太子信仰に関連を見る見方もある⁽¹¹⁶⁾。結局この大仏殿の場面には、多くの説話的意味が込められていることが解る。

鏡 五月五日

尼公が東大寺に向かうのは新緑の初夏とみられたが、この大仏殿のシーンは、これまでのように節供日を表すと考えれば、五月五日の表現とみて良いと思う。絵巻大仏殿図左から一・二間目の長押上小壁に描かれた花唐草文様は、五月節供の軒に菖蒲（あやめ草）を茸く故実になみ、花あやめに洒落たものかも知れない。

大仏殿中に二面の鏡（七佛寺巡礼私記⁽¹¹⁷⁾記載）がある。金銀に塗り分けられ「日月輪」の表現である⁽¹¹⁷⁾。習合論から少し離れて、ここで鏡について考えてみたい。その手懸かりはやはり平安時代に詠われた和歌にある。

『能因集』⁽¹¹⁸⁾に、「与州にて詠之、楽府和歌百鍊鏡 五月雨にとくるまがねを磨きつゝ、照る日とみゆるます鏡かな」（二一九）とある。この詠は白居易「百鍊鏡」詩を踏まえたものである。また源俊頼の『散木奇歌集』⁽¹¹⁹⁾に、「五月五日の心をよめる あやめひくみぬまをみればから国にけふやかゝみのかげをますらん」（二八八）とある。この詠も「百鍊鏡」を踏まえる。鏡は白居易「百鍊鏡」詩を通して五月五日に関連づけられており、その意は平安文学にも浸透していた⁽¹²⁰⁾。

白居易「百鍊鏡」詩は、天子に献ずべく五月五日に鑄られた鏡を詠うが、その詩句に「背有九五飛天龍 人人呼為天子鏡」なる一節

がある。「九五」は天子位を象徴する『易経』語彙の一つであり、乾卦爻辞「九五飛龍天に在り。大人を見るに利ろし」を踏んでいる。

さらにその爻辞は乾卦文言伝の「子曰く、同声相い応じ、同気相い求む」をも導く。すなわち、大仏殿日月輪（日月鏡）に、五月五日の天子鏡（大仏は天子である）を重ねてみれば、大仏（大日如来）と尼公（天照大神）の「同気相い求む」深遠な交歓が彷彿する。またこの場面は、大仏が象徴する乾卦（乾为天）と尼公が象徴する坤卦（坤為地）が邂逅した泰卦（地天泰）の場面と見れば、泰卦の象伝には「すなわちこれ天地交わりて万物通ずるなり。上下交わりてその志同じきなり。内陽にして外陰なり。内健にして外順なり」、象伝には「天地交わるは泰なり。后（天子）もつて天地の道を財成し、天地の宜（義）を輔相し、もつて民を左右す」とあって、これによれば、天子の政の要諦を述べるゝと解することができる。

五月五日の鏡をキーワードにこの場面を見たが、大仏が天子と同義であることを考えると、政治の理想を説く『易経』を援用することは絵巻作者の目的の一つだったのではないかと思う。絵巻詞書によつて描かれた大仏殿の場面は、大仏（大日如来）・天照大神同体を示す宗教的世界観、白樂天「百鍊鏡」から導き出される『易経』の理想主義的世界観などが重奏し、意味内容が一気に展開し、われわれに信貴山縁起絵巻の新しい一面を示しているように思われる。

なお、五月五日は、鳥羽天皇（以下、表記はすべて鳥羽天皇とする）の東大寺受戒日でもある。（康治元年（一一四二）五月五日）⁽¹²²⁾この場合、天子とは鳥羽天皇（一一〇三〜五六、在位一一〇七〜一三）に掛けられるのではないだろうか。現状の絵巻にはないが、かつて絵巻冒頭部分に言及された、命蓮の東大寺での受戒（『古本説話集』による）を想

起すれば、東大寺で受戒したという点で命蓮と鳥羽天皇とが二重映しになる。さらには、説話（絵巻）上の命蓮受戒の暦日が、そこに東大寺が描かれているとみられる以上、五月五日以外に設定されたと考えにくい（冒頭部暦日が、五月五日とそれに続く夏安居の時期に相当するとみて、次の飛倉巻七月七日に続く）。冒頭部は大仏と命蓮との関係をそのみ描いたわけで、それは大仏と命蓮、すなわち命蓮と鳥羽天皇の関係を予め示したことにほかならない、と思う。

ところで、鳥羽天皇受戒時の羯磨師は寛信であったが、寛信は勸修寺流藤原氏の流れの上にあるから、もし機会あつて命蓮説話と鳥羽天皇を関連付ける際には何らかの働きをしたであろう事も想像される。

信貴山遠望

尼公は大仏から「ひつじさる」の方角にある信貴山に行くように示された。前稿⁽¹²³⁾で説明したように、大仏の居処である切利天喜見城から西南の方角にあるのは善法堂である。

尼公が静かに大仏殿内陣から降り、西南に向かう。尼公の小さい姿が絵巻底辺に沿つて描かれるが、これは目を見上げれば自然に西南の方角（画面の左上は西南）を見ることになる故か。詞書にあるように「かすかにみゆる」信貴山が、歩き近づくにつれて次第に大きくなり、ついには画面一杯となつてあらわれるといふ絵巻ならではの表現で、きわめて印象深い。雄大な信貴山は山水屏風（京都国立博物館所蔵）の遠山に近似形（ほぼ同大）であることがまず注意され、山水屏風遠山の位置方角も西南とみられ、興味深い一致がみられる。

ただ絵巻が、山容に幅広層状の墨皴をほどこすところと、遠近法をあいまいにしめすところは、信貴山が聖地仙界であることを強く示すように思われる。さらに全体に紫雲をなびかせ、山の奥の空に雁が飛ぶところが絵巻では特徴的であるが、これは山上の異界を意識した表現であるとも言えるだろう。その異界とは、毘沙門天の住所、天界であると、考えたい。

なお、絵巻詞書が、あえて「しうむ」と「むらさきのくも」と二つの語詞を分けて使用していることの意味も重要で、筆者は「紫雲」は阿弥陀如来のほかに西王母（天照大神を⁽¹²⁴⁾含意）をも示唆し、「紫の雲」は皇后（国母）をしめす語であると考える。⁽¹²⁵⁾ 絵巻詞書は、尼公にこの「紫雲」「紫の雲」の両方の意味を掛けており、すなわち尼公はこの三者の性格をあわせ備えている。

この場面の季節表現は解りにくい⁽¹²⁶⁾が、あざやかな青と緑で彩られていたと思われることや黄葉を描かないことから、やはり夏の表現と思われる、山中の鹿の角が微妙に半透明に表されるところを七十二候の「鹿角解」にあたるとすると、「夏至五月中鹿角解」の日かと推測される。天空に飛ぶ鳥はやはり雁⁽¹²⁶⁾と考えておきたい。

信貴山寺の情景（三） 七月七日

二紙余の詞書を経て、絵は最終段に入る。紫雲の中から尼公があらわれ、命蓮山房に至り（山房を西南方角に設定）、絵の上では回り込んで山房下手側から命蓮に呼びかける。逆勝手表現が、場面に緊張感を与える。西王母が漢武御殿の西側に到着し、南面東向となり、武帝が東面西向きで対面するという場面（『博物志』）に対応する。す

なわち七月七日の出来事である。尼公は先ず西王母の振る舞いで信貴山上に至った。命蓮からみれば夏安居の終わり頃に尼公に再会したという事になる。

前に尼公の性格を、紫雲、紫の雲に掛けて、阿弥陀如来・西王母（じつは天照大神）、皇后（国母）と考えた。また母を示す記号も物語の中に多く埋め込まれている（坤卦、帚木、母子草）。絵巻の詞と絵は、くり返し尼公の本性をわれわれに示す。

ここでは次に、尼公が善光寺阿弥陀如来の性格を帯びて信貴山寺に影向し、命蓮は尼公のために講経した、などと物語が構想されたとみてもう少し追求する。

信濃国出身とされる命蓮を主人公とする信貴山縁起絵巻成立時点では、善光寺が意識されていることは確実である。信貴山寺では善光寺阿弥陀如来（「本師阿弥陀如来」）の存在がさらに早くから知られていただろう。善光寺如来が知られていたとすると、『廟幅偈』や弘法大師磯長廟説話が出現すれば、⁽¹²⁷⁾ 信貴山寺の聖徳太子信仰がこれに結ぶのは必然であると思われる。その結果、善光寺阿弥陀如来は、聖徳太子の母穴穂部間人皇后の変身であるという理解となる。聖徳太子が切利天善法堂で母穴穂部間人皇后のために説法をしたという、法隆寺由来の古い逸聞が想起されなければならない。⁽¹²⁸⁾ この逸聞はあまり表面化したようには見えないが、例えば醍醐天皇の国母胤子供⁽¹²⁹⁾ 養は、聖徳太子のこの故事逸聞にしたがった法要であると確信する。前稿でもふれたが、東大寺を釈迦説法の切利天喜見城とみれば、その西南善法堂の方角には信貴山が位置する（すなわち信貴山寺は善法堂とみられる）。また皇后の居処も「坤宮」である（善法堂は、切利天上の坤宮ともみられる）。聖徳太子は釈迦とされ、穴穂部間人皇后は

摩耶夫人に擬せられたのである。

それでは、善法堂に登退した摩耶夫人（穴穂部間人皇后も）は、阿弥陀如来とみなされたのかという問題がある。これには『梁塵秘抄』二二三番歌に解答があり、摩耶夫人が阿弥陀如来と一体であることが分かる⁽¹³⁰⁾。

右を言い換えると、尼公は善光寺阿弥陀如来であり、穴穂部間人皇后である。この姿を以って信貴山寺（じつは善法堂）に至り、命蓮（聖徳太子）に再会した。

信貴山縁起絵巻は、以上のことを命蓮と尼公にあてて描いているのではないかと考えたい。

重ねて言えば、法隆寺金堂の金銅釈迦三尊像の光背銘に「深懷愁毒」当造釈像尺寸王身」とあるくだりは、聖徳太子が釈迦如来同体とみなされることと、この釈迦像が優填王釈迦造像の作法に従っていることを示すと解され（すなわち善法堂における為母説法の釈迦）、さらには釈迦三尊像台座内の「相見」墨書を『摩訶摩耶経』由来とみれば、聖徳太子の切利天善法堂における為母説法譚は一定の根拠をもつものと考ええる。なお、母皇后が阿弥陀如来であると考えられたのはどの時点からかという重要な問題が残る。私見では早く天武持統朝の法隆寺金堂壁画成立時頃に遡るとしたいが、今は後考に付⁽¹³¹⁾す。

ここで少し別の角度から命蓮について考える。『信貴山寺資財宝物帳』によれば、命蓮は自身を雞足山中の迦葉に喩えており、実際に信貴山中で迦葉に劣らず厳しい修行に努めたと推測される。飛倉巻では、命蓮は飛鉢法を身につけるほどの聖であったことが示される一方、迦葉に倣い頭陀第一の貧しい姿で描かれるのが注目される。

その迦葉は、『過去現在因果経』巻第四に、「爾時儉羅厥叉国 有一婆羅門 名曰迦葉 有三十二相 聰明智慧」とあって、もともと「三十二相」をそなえる人であったことが知られる。さらに、『大智度論』巻第四初品第八菩薩積論には、「三十二相転輪聖王亦有」とある⁽¹³²⁾。すなわち、「三十二相」とは仏とともに転輪聖王の属性であるから、ここでは迦葉は転輪聖王の性格をおびているとみて良いと思う。その転輪聖王は七宝を具えるとされるが、その内とくに重要な宝珠は毘沙門天も具える（宝塔）。毘沙門天は命蓮の念持信仰する仏である。ここで絵巻の上では、迦葉と命蓮とが重層しているとみれば、命蓮も転輪聖王に等しい存在と設定されていると考えたい。

ところでその転輪聖王について浅井和春氏は、『大智度論』巻二五では転輪聖王の徳を仏法の王、法王に相当するものと説き、これが（転輪聖王とは）釈迦入滅後に正法を護持する「仏法興隆の王」であるとの認識に繋がった」とされ、その結果、わが国では上宮法王聖徳太子が転輪聖王に位置付けられた、とされた。そこで、信貴山毘沙門天が聖徳太子と習合していることも考えれば⁽¹³⁴⁾、また命蓮が転輪聖王に等しいほどだと認められれば、命蓮は聖徳太子とも近い関係（対応する関係）になるはずである。これが少し前で「命蓮（聖徳太子）」と書いた理由である。したがって聖徳太子の為母説法譚は、信貴山（切利天善法堂）を舞台にして成立することになると思う。聖徳太子が母穴穂部間人皇后のために、切利天善法堂で説法をしたという話題に還元されるのである。

さらには、命蓮が転輪聖王と近しいと認められれば、転輪聖王としての天子（天皇）⁽¹³⁵⁾も、絵巻中の命蓮に重層するとみることが許されるよう。なお話を遡れば、醍醐天皇も転輪聖王と位置づけられており、

尼公卷の構想は複雑な仕組みによって支えられ、物語が連動重奏するように筆者には思われる。

以上のように考えた上で、天照大神の性格を持った尼公は絵巻構想当時の天子と七月七日に命蓮の山房で邂逅した、と設定されたしたい。次ぎに命蓮を天子と見たときに、どのような構想が可能であるかを考える。じつは平安後期には、聖徳太子の為母説法譚（釈迦の為母説法譚）とパラレルな構造に映る鳥羽天皇と贈皇太后苾子の場合がある。次には、鳥羽天皇生母藤原苾子について考えてみたい。

藤原苾子

藤原苾子（一〇七六～一一〇三）は、承徳二年（一〇九八）に堀河天皇（一〇七九～一一〇七）に入内した。女御苾子が無事に皇子（のちの鳥羽天皇）を出産したのは康和五年（一一〇三）正月十六日のことである。御産所は勸修寺流藤原氏顕隆（顕隆は為房の二男、後の勸修寺流藤原氏長者。一〇七二～一一二九）の五条高倉第である。しかし産褥のために同月二十五日に没した。御産のわずか九日後である。

苾子は藤原公実（一〇五三～一一〇七）の妹である。その子鳥羽天皇の乳母は、公実の妻光子（一〇六〇～一一二二）、顕隆妻の悦子（一一一五）らである。光子は勸修寺流藤原氏長者為房の妹であり、このときの苾子御産の差配は、藤原公実とともに一方では勸修寺流藤原氏の関与によってなされたことがわかる。¹³⁶ なお悦子は『江談抄』筆録者の藤原実兼（信西父）の姉弟である。

鳥羽天皇誕生時には、賀茂明神の靈験譚がある。鳥羽天皇自身が藤原頼長（一一二〇～一一五六）に語ったところによると、苾子の母

睦子（？～一一二四）が男児誕生を賀茂明神に祈ると、夢中に明神が衣に示現し、明神の予言通りに鳥羽天皇が生まれた、というものである。¹³⁷ これは、人力を超えた誕生を語る点で釈迦や聖徳太子の物語に近い。母苾子が御産後はなくなる事も摩耶夫人を想起させる。

この靈験譚がある程度知られていた事は、後の『続古事談』（一一七）に採られていることや、実際に睦子が衣（神の依代）を御躰として自邸の一郭に造立した賀茂別社が建久五年（一一九四）までは確認される事からわかる。¹³⁸ 鳥羽天皇は神との関わりを自覚していた。

さて嘉承二年（一一〇七）鳥羽天皇が踐祚するに際し、苾子は皇太后を追贈され、さらに翌天仁元年（一一〇八）七月七日に国忌が置かれた。¹³⁹ 苾子は七月七日に関連づけられている。七月七日は南嶽慧思『立誓願文』に「釈迦牟尼」仏徒癸丑年七月七日入胎」とあるその日付けにちなんだ可能性もあるかと思われ、苾子は「神母」¹⁴⁰とされたと考えられる。つまり鳥羽天皇は釈迦、母苾子は摩耶夫人に比喩的に合致する。この関係は聖徳太子と母穴穂部間人皇后との関係に等しい。なお、鳥羽天皇に聖徳太子信仰があつたことは周知である。鳥羽天皇の四天王寺参詣は、「神子」宣言以降に増加していく。

こう考えると、絵巻作者は、聖徳太子と母穴穂部間人皇后の物語を、鳥羽天皇と母苾子の物語に描き重ね再生産を試みたとも思われる。なお、明神が示現した「衣」（依代）と尼公が持つ「柄」も二重構造を作るとみたい。今まで考えてきたようにこれは信貴山縁起絵巻で重要な立場にある天照大神の、その機織神たる性格の象徴であるだろう。また衣は「依代」としての性格をも持つとみたい。

次の場面の命蓮の法華経講経は、聖徳太子の切利天善法堂における為母説法や、鳥羽天皇の母苾子供養の二度の大きい法要（保延二

年(一一三六)五部大乘経供養、久安四年(一一四八)宸筆御八講⁽¹⁴³⁾をイメージさせるものだろう。鳥羽天皇の為母供養の願文は、いずれも切利天における母供養を詠っている。

信貴山寺の情景(四)

信貴山縁起絵巻に描かれる命蓮山房は、今仮に描かれる順に①から⑤の番号をつけると、大きさの異なる②(延喜加持卷第九紙)を除き、①(飛倉卷第七紙)、③(延喜加持卷第二十三紙)、④(尼公卷第二十二紙)第二十三紙半ば)、⑤(尼公卷第二十四紙)は同じ下図を用いたことがわかる⁽¹⁴⁵⁾。異なるのは描かれる範囲で、①④は同様だが、④の場合には尼公が紫雲の中からあらわれることに意味があり、③⑤では①に見えない懸崖造構造をあらわし、その柱組を描く。③と⑤を比較すれば、⑤が懸崖造柱組下辺まで見せ、そこにうすく水をにじませ、沢であることを明示し、さらに山房取りつきに閼伽棚を付加する。

この描き分けに意味をさぐりたい。⑤のうすい水(沢)と閼伽井(水)の意味を考える。そこで想起するのが、前に検討した陶淵明『桃花源詩』である。『桃花源詩』中の四句「草榮識節和 木衰知風厲 雖無紀歷志 四時自成歲」を見る。静かに季節がめぐり四季が自然にうつろうという、心地好く調和した世界を詠うものと思われるが、ここに「節」「四時」の語詞が用いられている。これと語法内容がよく一致して注意を引く表現が『易経』六十四卦の節(水沢節)にある。『桃花源詩』は節を含蓄しているのであり、信貴山縁起絵巻の作者は、絵巻後段に「節」を導くための伏線に用いたのではないか、と思う。伏線が連鎖的に展開するという現象が絵巻の中で起き

ているように見える。

さて『易経』節の卦辞には、「節は、亨る。苦節は貞しくすべからず」とあり、彖伝に「彖に曰く、節は、亨る。(中略)天地は節ありて四時成る。節してもって度を制すれば、財を傷らず民を害せず」、象伝に「象に曰く、沢上に水あるは節なり。君子もって数度を制し徳行を議す」とある。

右の大意は「節は節制・節度であり、過ぎたる処を抑えて、中庸に帰せしめる道である(中に帰すことが重要である)。天地に自ずと節があるからこそ春夏秋冬の四季が巡行する。その故に聖人も節を保ち、制度をたて定めれば、(中正の徳によって)財物を傷つけ民を害することもない。(卦の)節とは沢上に水がありその量に限度のあることを言う。君子が礼法や制度を整え徳行を議するにも、かならず節度を尊ぶのである⁽¹⁴⁶⁾。というほどのものだと思う。なお「和」については、『中庸』に「発して皆節に中る。これを和と謂う」とあり⁽¹⁴⁷⁾、やはり節と共鳴する。

節が「水沢節」(沢上の水)であることからすれば、沢ある山房に初めて水(閼伽棚)が現れた⑤の描写はこれに相当するものと考えたい。そのように見れば、命蓮が天子と重層して描かれているだろう事にも意味が伴ってくる。『易経』によって君子のあるべき姿を示すという意図があるのではないか。もともと『易経』とは経世済民を説き、その象伝の内に「主として儒家思想によって道德上・政治上の要義が述べられている⁽¹⁴⁸⁾。また「儒教的倫理や政治道德を説く」と指摘されており、命蓮と重層した天子が描かれる場面に援用されるのは理解できる。尼公巻においては、『易経』の「坤」「泰」「節」が絵巻制作に関連しているのではないかと推測したい。

校倉

巻末に描かれる校倉は、詞書「その倉も今に朽ち破れて、その木の端をも露ばかり得たる人は、護りにし、毘沙門造り奉りて持し奉る人は、必ず徳つかぬ人はなかりけり」に対応している。この倉の木の端を護りにし、毘沙門天をつくる人もあったという。はじめにみたように、校倉が天照大神自身かあるいはその依代であったことが重要で、その故に御衣木として機能したことがわかる。その御衣木で毘沙門天を造ることから、ここで遂に毘沙門天・天照大神同体が明らかにされた、と解釈したい。すなわち、信貴山寺毘沙門天（＝聖徳太子）が天照大神と、天照大神たる聖徳太子（救世観音）が信貴山寺毘沙門天と、二重に習合していたのである。

校倉に納められた衾も、天照大神の機織神としての性格を象徴する依代であったはずで、これが護りとされるのは、右記に同じで、ここでも神仏とのつながりが示される。平安時代の人びとの神と仏の物語としての信貴山縁起絵巻最終章としてふさわしい。

巻末の山容は、前にも書いたように、須弥山世界の高いところにある天界を象徴する三山形遠山であり、上代からの形式を引き継いでいる。神と仏の世界の古い象徴である。早くは、法隆寺金堂の釈迦三尊像の右に安置された阿弥陀如来像台座の絵に描かれているが、この阿弥陀如来像こそは後世に本師阿弥陀如来とされた、聖徳太子母穴穗部間人皇后に擬せられるべき尊像である。⁽¹⁵⁾

結び

絵巻に従って書き連ねてきたが、ここで短く整理してみる。

記述中に、しばしば『万葉集』などの和歌を引用してきたが、白畑よし氏がはやく絵巻と和歌との関係を指摘しておられるように、⁽¹⁶⁾ 信貴山縁起絵巻の場合も、詞書の及ばない場に既存の和歌・詩文などが働きかける状況はあり得ると思う。石山寺縁起絵巻巻二第四段の絵が、信貴山縁起絵巻から引用されたのは、尼公巻のその場が『万葉集』歌をテーマにした可能性と関係があるかと思う。同様に、漢詩文がソースとされたこともおそらく確実で、『桃花源詩』の引用は十分に認められる。尼公巻に感じられる穏やかな心地よさは『桃花源詩』によるものかとさえ思う。その『桃花源詩』が、「紀歴の志無しと雖も、四時自のずから歳を成す」と詠うが、信貴山縁起絵巻がまさに絵巻上見えるように表現しているのが、その「紀歴」であり「四時」である。絵巻各々の場面に紀日があてられており、それが節供に合致し順序よく並んでいる（延喜加持巻は別の紀日）、として良い。これはきわめてよく構想された仕掛けであって、おそらく一方に宮廷の年中行事的な発想があり、他方ではより広範な神仏にかかわる信仰や形而上的志向があつて具体を支えている。

なお延喜加持巻には、落板敷上戸前に置かれる年中行事障子が、銀地墨書にあらわされて二度描かれている。年中行事障子はじつさには『帝王編年記』仁和元年五月（三月）二十五日条にあるように「絹突立障子」であり、本来銀地であったとは思われないが、宮廷公事の名目を書きとどめた重要な調度であることから強調的表現と

したかと想像したい。節供に従って表現された信貴山縁起絵巻のテーマとは無関係ではない。

つぎに、大仏殿の場面をみれば、これがただ上代の信仰の結実としての東大寺を見せるのみではなく、鳥羽天皇の受戒に掛けながら、尼公（＝天照大神・救世観音）を通して、より広く新しい信仰世界へと導く窓になっていることがわかる。絵巻にこのような形で天照大神が強調されることに驚き、その時代のいわゆる中世神話の新展開とは無縁では無いことを知る。一方で、いわばありのままに表された尼公の行動は、やはり当時のごく限られた鑑賞者を前提にした幽玄微妙な図柄のはずである、とも思う。そのような表現の態度は、延喜加持巻とも共通する。延喜加持巻には醍醐天皇の存在が示されるが、そこには天子への畏怖と敬愛の眼差しがある。この感覚は命蓮と尼公にも全巻を通してかわらないものであり、いわば信貴山縁起絵巻の通奏低音をなすものと思う。

その延喜加持巻の詞章の主体は、本文で考えたように勸修寺流藤原氏であると思う。醍醐天皇に近しい語り口である。命蓮の加持祈祷を引き出したのは、はじめは藤原恒佐や源清蔭であったと思われるが、実際に指導的な役割を果たしたのはおそらくは醍醐天皇の母贈皇太后胤子の出身家である勸修寺流藤原氏の人だろう。具体的には延喜加持巻の詞章は帝に近侍した人の語り口であり、藤原定方の存在が浮かびあがる。定方の語り口が後世に受け継がれ絵巻の詞章が成立したという事か、と思う。延喜加持巻の言説がある以上、信貴山縁起絵巻に勸修寺流藤原氏の意図と関与を考えなければならぬ。この定方は、延喜三年（九〇三）八月の醍醐天皇による国母胤子の供養に立ちあっている。その供養は聖徳太子の故事逸聞にしたが

い、切利天善法堂における為母説法に倣うものだった。

信貴山縁起絵巻尼公巻の構想は、聖徳太子の為母説法譚と、これを受けた醍醐天皇の勸修寺における国母胤子供養に追随したのではないかと、というのが筆者の推測である。尼公（善光寺阿弥陀如来であり、じつは穴穂部間人皇臣）が、信貴山寺で命蓮である聖徳太子に相見し、そこで太子の為母説法が行われる、というものだと思う。聖徳太子の為母説法譚は、すでに太子薨去時には成立していた説話であり、本来は切利天善法堂での説法譚であるが、舞台を東大寺西南の信貴山寺に設定して描かれた、ということだろうと思う。それは信貴山寺が毘沙門天の霊地であったためで、善法堂とは四天王が居るべき場所でもあったからである（真諦訳『佛説立世阿毘曇論』など）。その信貴山が、勸修寺流藤原氏と命蓮による醍醐天皇加持を導きだし、物語の連環を生んだのだ。

本文で勸修寺流藤原氏の顕隆の妻悦子が、鳥羽天皇の乳母の一人としたが、勸修寺流藤原氏が親身になって鳥羽天皇を見守ったことは想像に難くない。本文で記したように、鳥羽天皇の誕生譚は釈迦の伝記に通じ、聖徳太子の伝記にも重なる。また早逝した母苺子のための法会が企てられ、実際に二度の法華八講が記録に残り（切利天説法の態）、国忌も設置された（前述）。尼公巻はその鳥羽天皇の為母説法譚とも重層しているのではないかと、筆者は考える。そういう発想をしたのは、命蓮の醍醐天皇加持と、醍醐天皇の国母胤子供養との二つの記憶のある勸修寺流藤原氏の家系であると筆者は考える。

ところで、勸修寺流藤原氏のうちで、東大寺に関係を持った人は、十二世紀前半に二人がいる。一人は、藤原為隆（一〇七〇～一一三

○)である。天仁二年(一一〇九)には造東大寺長官となる。また為隆は信貴山寺に四天王像を造立供養した(『後拾遺往生伝』)。ただし明確な年代は分からない。大治二年(一一二七)には六角堂近くに丈六堂を建て、そこには阿弥陀如来像とともに四天王像を安置している。⁽¹⁵²⁾ 為隆はおそらく聖徳太子信仰をもっていた人だろうと想像する。またその弟である寛信は前述のように、久安三年(一一四七)に東大寺別当となる。寛信は康治元年(一一四二)五月五日の鳥羽天皇の東大寺受戒時の羯磨師である。⁽¹⁵³⁾

勸修寺流藤原氏ではないが、この寛信の弟子興然(一一二二―一二〇三)に信貴山寺との交流があることは、記憶すべきである。興然は久寿二年(一一五五)に、信貴山寺に(如法)尊勝法や毘沙門天法を伝えている(『四巻』)。この事をもつても、当時の信貴山寺と勸修寺の交流が分かる。この興然はすぐれた画像研究者でもある。もう一人確認できるのに醍醐寺の深賢がいる。深賢は元久二年(一一一〇)に、参籠中の信貴山寺で信救の『白氏新楽府略意』を写した。『新楽府』には「百鍊鏡」がある。勸修寺や醍醐寺、それに東大寺という環境がやはり大事だろうと思う。

最後に、「牝馬之貞」の例で知ることが出来るように、尼公巻に『易経』が援用されていると考えるのは、本文に記したとおりである。『易経』は、『論語』述而第七に「子曰、加我数年、五十以学、易可以無大過矣」とあるように、齢五十にして学ぶもののようにだ。信貴山縁起絵巻には尼公巻の、木曾路の場面(『坤』)、大仏殿の場面

(『泰』)、最後の命蓮姉尼公邂逅の場面(『節』)に、『易経』テキストとの関係を考えてみた。結局「節」は、その主爻である九五に依れば、陽爻が正しく「天子の位に在って、率先して節度の道を行われ

る。かつ中庸にして度を過ぐすことがなく、正義で私心がないから何事も滞りなく行われるのである」と謂うように、⁽¹⁵⁴⁾ 政の道を説いているのではないだろうか。信貴山縁起絵巻が「節供」を主題にイメージ展開しているところと、この「節」に至る思想的帰着には、よく考えられた一定の関係があるように思われてならない。三月三日の桃樹が導く『桃花源詩』「節」の意味は重大である。今後も『易経』については、さらに考えることとしておきたい。

注

- (1) 奈良県指定有形文化財『信貴山寺資財宝物帳』、朝護孫子寺所蔵。『国宝信貴山縁起絵巻―朝護孫子寺と毘沙門天王信仰の至宝―』(奈良国立博物館編集発行展覧会図録、二〇一六年)に図版と解説がある。翻刻は『平安遺文』四九〇四。東野治之氏「信貴山寺資財宝物帳―翻刻と覚書―」、『檀原考古学研究所論集』第十七、二〇一八年。命蓮は、置文に『春秋左氏伝』「不能弃菽麦」を引く程の知識ある聖とみられる。また命蓮が法華経信仰を主に(「更無人音」「更無他行」「皆成仏道」は法華経語彙)、神祇をも等しく尊崇したことが、その内容から理解できる。
- (2) 拙稿「信貴山縁起絵巻の信仰背景」、『信貴山朝護孫子寺蔵 国宝信貴山縁起絵巻調査研究報告書―研究・資料編―』、奈良国立博物館・東京文化財研究所、二〇二〇年。
- (3) 『島本町史』(島本町史編さん委員会編集、島本町役場発行、一九七五年)一〇五頁。
- (4) 撰津国島上郡水無瀬庄絵図、正倉院中倉一四、紙本墨画淡彩、二八・八×六九・八cm、天平勝宝八歳(七五六)。
- (5) 栄原永遠男氏「古代荘園の作成と機能」(『日本古代荘園図』、東京大学出版会、一九九六年)の注八。
- (6) 注3『島本町史』によれば、山崎庄の散所の長者が飛倉巻下衆徳人のモデルである。長者はまた山崎庄田堵とも重なる。命蓮の時代からは降るが天承元年(一一三一)七月には、田堵ら八人が連名で東大寺に

- 対して五節供に奉仕し畠の地子を弁済することを約束した文書が残る
〔東大寺文書〕四一七一〔平安遺文〕二二〇一〕。
- (7) 同前書一一一頁。
- (8) 三木紀人氏は『宇治拾遺物語』(新日本古典文学大系四二、岩波書店、一九九〇年)の脚注に「飛来したのはそれなりのいわれがあるという判断による返事」とされている。
- (9) 『古事記』上つ巻「伊邪那岐命と伊邪那美命」三貴子分治の段。倉野憲司校注『古事記』(岩波文庫、一九六三年)三三三頁。
- (10) 岡田精司氏、『古事記』(日本思想大系一、岩波書店、一九八二年)の頭注「御倉板拳之神」(四二頁)。
- (11) 西宮一民氏校注『古事記』(新潮日本古典集成二七、新潮社、一九九九年)三六一頁。
- (12) 校倉が信貴山にかかるところ、中遠景の大杉とは明らかに遠近が逆転している。なおこの大杉は「わが庵は三輪の山もと恋しくは訪ひきませ杉たてるかど」(『古今集』九八二)の標の杉か。
- (13) 大江匡房『江家次第』は天永二年(一一一一)の匡房没年直前まで執筆。匡房には他に『江家中行事』もある。
- (14) 『雲図抄』は、勸修寺流藤原氏長者、藤原顕隆(一〇七二―一一二九)が弟の重隆(一〇七六―一一一八)に依嘱して成立した、宮中年中行事を指図を以て説明したもの。成立は永久三年(一一一五)より元永元年(一一一八)の間。
- (15) 橘長盛「主なくてさらせる布を織女にわが心とや今日はかさまし」は七月七日と布引の滝を重ねている。
- (16) 『信貴山寺資財宝物帳』に「伏願、鎮守山王、勸請諸神、加於冥助、護持伽藍」とある。
- (17) 信貴山寺資財宝物帳』に「尋於先跡、続於鶏山」とある。
- (18) 龜田孜氏「信貴山縁起虚実雑考」、『佛教藝術』二七号、一九五六年。以下、命蓮像に迦葉像を投影し表される場面がみえるが、迦葉の出身家は、「北方毘沙門天宮の宅の如く」であり(『仏本行集経』巻第四五、『大正新脩大藏経』三卷No.190, 861c11~861c12)、また林中十二年梵行を修したところ(『毘尼母経』、『大正新脩大藏経』二四卷No.1463, 803c18~803c19)。また迦葉は、父母が畢鉢羅樹神に祈り誕生した(『法華文句』一、『大正新脩大藏経』三四卷No.1718, 9c26~9c29)、後文の鳥羽天皇の「神子」譚にも重なる。
- (19) 大江匡房『江都督納言願文集』二二二「白河院熊野山多宝塔供養願文」に「念深於鶏足之洞」、同三二二三「修理大夫頭季卿仁和寺九体阿弥堂供養願文」に「宜受衣於鶏足之洞」。
- (20) なお『梁塵秘抄』一八二歌にも「迦葉尊者の石の室、祇園精舎の鐘の聲、醍醐の山には仏法僧、鶏足山には法の聲」と歌われる。鶏足山が醍醐寺と関連付けられることも注意すべきことである。醍醐寺も早くから鶏足山であるとされた(信貴山寺と醍醐寺が近い関係にあった可能性を想像したい)。
- (21) 志田延義氏校注『梁塵秘抄』(日本古典文学大系七三、岩波書店、一九六五年)五〇二頁補注参照。
- (22) 小南一郎氏『西王母と七夕伝承』(平凡社、一九九一年)「第八章神話的原理とその人間化」二八二頁。
- (23) 木川敏雄氏「大迦葉と彼の頭陀行」『印度学仏教学研究』三二巻一、一九八三年。
- (24) 『梁塵秘抄』一八一歌「迦葉尊者の裳の裾は、文殊の袂に打ち羽振き、大通王の佩ける太刀、大悲の膝にぞ解き懸けし」。
- (25) 志田延義氏校注『梁塵秘抄』(前出注17書三七六頁)の頭注に「糞掃衣の」その見苦しい衣の裾」とある。
- (26) なお迦葉の衣は十萬両にも値する(『大智度論』巻第二六、『大正新脩大藏経』二五卷No.1509, 252c26~253a01)。
- (27) 白居易『長恨歌』の一節「七月七日長生殿 夜半無人私語時 在天願作比翼鳥 在地願為連理枝」によって、この場面は七月七日となる。なお『博物志』に、西王母が漢武帝を訪問し桃を与えるのは七月七日である。『長恨歌』は玄宗皇帝が漢武帝として設定されていることに注意。
- (28) このパラグラフは、木村紀子氏の左記論文による。
- (29) 木村紀子氏「信濃国聖事」のなりたちと「信貴山縁起絵」、『書と声わざり』『宇治拾遺物語』生成の時代一、清文堂出版、二〇〇五年。二〇〇〇年初出。
- (30) 福山敏男氏「信貴山と命蓮」、『美術研究』一五二号、一九四九年。
- (31) 東野治之氏前掲注1論文。
- (32) 藤原恒佐は、かつて信濃国権介(寛平十年(八九八)任)、承平二年(九三二)時は中納言、左衛門督、東大寺俗別当。承平七年(九三七)時は右大臣、東大寺檢校。

- (24) 『扶桑略記』裏書に「(延長八年八月)十九日庚戌、依修験之間、召河内国志貴山寺住沙弥命蓮、令候左兵衛陣、為加持候御前」とある。
- (25) 鈴木敬三氏『初期絵巻物の風俗史的研究』(吉川弘文館、一九六〇年)四五二頁。
- (26) 洞院実熙『蛙抄』(一五世紀前半)。「輿軍図考」引用の『蛙抄』該当部分(国立国会図書館デジタルコレクション)に、「蛙抄云車副事 院十二人或八人、関白八人或六人、親王同、大臣六人或四人、大納言四人或二人、中納言一人、宰相散位一人、僧正四人、僧都法印二人、律師法眼法橋一人、以上或抄説也」。
- 『蛙抄』の車副に関する記述は年中行事絵巻(東京国立博物館ほか所蔵)・石山寺縁起絵巻(石山寺所蔵)とよく合致し、古式維持がわかる。石村貞吉氏『有識故実』(講談社学術文庫、一九八七年)参照。
- (27) 年中行事絵巻卷十五関白賀茂詣の卷末部分の場面が参考になる。
- (28) 斎木涼子氏「仁寿殿観音供と二問本尊―天皇の私的仏事の変貌―」、『史林』九一巻二号、二〇〇八年。
- (29) 鈴木敬三氏注25書九五頁。なお、『小右記』承暦三年(九九二)九月朔日条に「近代三四位袍其色一同」とも記される。
- (30) 鈴木敬三氏注25書一〇四頁。
- (31) 泉武夫氏『躍動する絵に舌を巻く 信貴山縁起絵巻』(小学館、二〇〇四年)六一頁。
- (32) 『三条右大臣集』に、「延長八年九月、みかとおほんやまひをもくならせ給ひて、御くらひさらせたまはんとしける時、よみ給へける かはりなんよにはいかてかなからへむ おもひやれともゆかぬこゝろを」「かくて、みかと九月廿九日かくれさせ給にけるをなきて、中納言兼輔のもとにいひつかはし給へる 人のよのおもひにかなふものならば わかみはきみにをくれましやは はかなくて世にふるよりはやましなの みやのくさ木とならまし物を」などの和歌があり、醍醐天皇との近い関係が知られる。
- (33) 定方父の勧修寺流祖高藤と恒佐は従兄弟。大きくは藤原氏北家の冬嗣末のファミリーである。
- (34) 福山敏男氏「信貴山縁起絵巻に見ゆる建築」、『畫説』三二一、一九三九年。
- (35) 鈴木敬三氏注25書一四二頁。
- (36) 『群書類従』本による。なお、石清水臨時祭試案については、『江家次第』にも言及があり、火炬屋(炬火屋)についての記述もある。
- (37) 松浦正昭氏「毘沙門天曼荼羅と説話絵」、『毘沙門天像』、日本の美術三一五号、至文堂、一九九二年。
- (38) 谷口耕生氏「信貴山縁起絵巻」研究序説、「信貴山朝護孫子寺蔵 国宝信貴山縁起絵巻調査研究報告書―研究・資料編―」、奈良国立博物館・東京文化財研究所、二〇二〇年。
- (39) 宮本常一氏『絵巻物に見る日本庶民生活誌』(中公新書六〇五、一九八一年)一六四頁。
- (40) 宗懐著・守屋美都雄氏訳注・布目潮瀨氏補訂『荆楚歳時記』(平凡社東洋文庫三二四、一九七八年)。中村喬氏『正・続中国の年中行事』(平凡社選書一五・一三四、一九八八年・一九九〇年)。などを参照した。
- (41) 佐竹昭広氏・山田英雄氏・工藤力夫氏・大谷雅夫氏・山崎福之氏校注『万葉集』(二)(岩波文庫、二〇一三年)注三〇九は、さらに『藝文類聚』「神境記」松に遡る。
- (42) 倉野憲司校注『古事記』(岩波文庫、一九六三年)三三三頁。
- (43) 千野香織氏「信貴山の成立―風景表現の日本化について―」(『信貴山縁起絵巻』名宝日本の美術第一巻、小学館、一九八二年)一二五頁。佐野みどり氏「説話画の文法―信貴山縁起絵巻にみる叙述の論理―」(『日本絵画史の研究』、吉川弘文館、一九八九年)一六頁。
- (44) 川端真理子氏「高松塚古墳壁画における日月と遠山表現」、『美術史研究』第四五冊、二〇〇七年。
- (45) 岸俊男氏「東大寺山堺四至図について」、『正倉院年報』五号、一九八三年。
- (46) 竹村信治氏「(絵語り)の構図―『信貴山縁起』／『信濃国聖事』―」、『日本文学』四一卷七号、一九九二年。
- (47) 『僧妙達蘇生注記』(『続々群書類従』卷一六所収)。天曆九年(九五五)を余り降らない頃に成立した。命蓮のこととして、「河内国深貴寺明蓮師者 卅年之内奉説法花 无量罪除 兜率天内院高座之上 可講法花経」とある。
- (48) こころ辺りの図が、後の石山寺縁起絵巻にそれとわかる図様で用いられていることは良く知られている。
- 北澤菜月氏「信貴山縁起絵巻」の伝来をめぐって―近世におけるその評価と住吉模本の意義―、『信貴山朝護孫子寺蔵 国宝信貴山縁起絵巻調査研究報告書―研究・資料編―』、奈良国立博物館・東京文化財

研究所、二〇二〇年。

- (49) 『令』卷第十一「雜令」第卅に「凡正月一日。七日。十六日。三月三日。五月五日。七月七日。十一月大嘗日。皆為節日」とある(『日本思想大系』三、『律令』(岩波書店、一九七六年)による)。ここに九月九日が見えないが、これは天武天皇忌日に当たるために避けられ、大同二年(八〇七)に至って再開された。
- (50) 注40の『荆楚歲時記』二〇九頁による。
- (51) 『日本紀略』に「寛平五年九月九日辛巳。重陽宴、題云、觀群臣佩茱萸」とある。
- (52) 小川環樹氏『中国詩人選集第六卷王維』(岩波書店、一九五八年)「跋」二二三頁。
- (53) 中島博氏「麻布山水図について」、『正倉院年報』一七号、一九九五年。
- (54) 木村紀子氏前掲注22論文。
- (55) 高田真治氏・後藤基巳氏訳著『易経』上下(岩波文庫、一九六九年)による。
- (56) 井上泰氏「信貴山縁起」尼公の巻の(絵語り)、『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部』五六号、二〇〇七年。
- (57) 『栄花物語』(下)(日本古典文学大系七六、岩波書店、一九六五年)「駒競べの行幸」の一六〇頁。
- (58) 前掲注50。
- (59) 中村喬氏著『中国の年中行事』(平凡社選書一一五、一九八八年)二三七頁。『初学記』(唐徐堅撰)は平安時代には良く知られている。
- (60) 『古事記』上つ巻に「その大嘗を聞こしめす殿」(岩波文庫『古事記』三九頁)、『日本書紀』神代上第七段に「復天照大神の新嘗しめす時を見て、則ち陰に新宮に放屎」(岩波文庫『日本書紀』(二)七四頁)、一書に「日神の新嘗しめす時に乃至びて」(同八〇頁)とある。
- (61) 『日本書紀』皇極天皇元年十一月「丁卯に、天皇新嘗御す」(岩波文庫『日本書紀』(四)一九八頁)とある。
- (62) 小南一郎氏『西王母と七夕伝承』(平凡社、一九九一年)「第四章人日と玉章」一二四頁。
- (63) 人勝(人勝残欠雑張)、正倉院北倉一五六、三一・〇×三一・〇cm。
- (64) 山中裕氏『平安朝の年中行事』(塙書房、一九七二年)一三一頁。
- (65) 小南一郎氏注62書。一二七〜一二八頁。
- (66) なお「杖」は西王母の持物(仙人杖、西王母杖)でもある。小南一郎氏注62書七五頁。
- (67) 大江匡房『江家次第』巻二「卯杖事 正月上卯」。
- (68) 小林太市郎氏「信貴山縁起の分析―ひいてその絵解きのころみ」、『佛教藝術』五〇・五一号、一九六二・六三年。
- (69) 阿部泰郎氏「山に行う聖と女人『信貴山縁起絵巻』と東大寺・善光寺をめぐる」、『湯屋の皇后』、名古屋大学出版会、一九九八年。一九九一年初出。
- (70) 鈴木敬三氏「蒲葵扇」(『有識故実大辞典』(吉川弘文館、一九九五年)六三五頁)。
- (71) 亀井若菜氏「信貴山縁起絵巻」論(『語りだす絵巻』、ブリュッケ、二〇一五年)注一四と注三八。
- (72) 千野香織氏「New Approaches to 12th Century Narrative Painting in Japan」(十二世紀の物語絵画(信貴山縁起絵巻))研究の新しい試み)、『千野香織著作集』、ブリュッケ、二〇一〇年。二〇〇一年初出。
- (73) 小南一郎氏「桃の傳説」(『東方学報』七二号、二〇〇〇年)五五頁。
- (74) 九条家本延喜式卷三十裏文書、長元八年十月二日「大中臣為政解」(『平安遺文』五四五)。
- (75) 取替川を「大和国添下郡鳥貝郷の辺りか」(『和歌の歌枕・地名大辞典』、おうふう、二〇〇八年)とすれば、富雄川となる。
- (76) 松樹と桃樹の列ぶ場面は、聖徳太子三歳の事績「桃花より青松を賞す」(『聖徳太子伝暦』)を想起させる。
- (77) 「三千年」の語は、西王母が漢武帝に与えた桃にちなんでいる。
- (78) 『落窪物語』(新日本古典文学大系一八、岩波書店、一九八九年)二二三頁。
- (79) 泉武夫氏注31書一〇二頁。
- (80) 阿部泰郎氏注68論文。
- (81) その時の東大寺別当は勝覚(醍醐寺座主定賢の弟子、東大寺別当の前には醍醐寺座主、後に醍醐寺三寶院創建)。俗別当は信貴山に信仰のある藤原為隆(勸修寺流藤原氏)。後考するように勝覚は天照大神と大日如来の関係について深く考察している(斎木涼子氏)。
- (82) 『東大寺要録』本願章第一(筒井英俊氏校訂『東大寺要録』)十一頁。
- (83) 斎木涼子氏「東大寺僧の伊勢神宮参詣と中世的神仏習合」、『頼朝と重源東大寺再興を支えた鎌倉と奈良の絆』、奈良国立博物館、二〇一二年。
- (84) 谷口耕生氏の発言。

- (83) 隋唐の制では、三月上巳に皇后によって先蚕儀礼が行われる。新城理恵氏「先蚕儀礼と中国の蚕神信仰」、『比較民俗研究』四号、一九九一年。
- (84) 小野勝年氏「正倉院の年中行事品」、『佛教藝術』一〇八号、一九七六年。
- (85) 『古事記』上つ巻には「天照大御神、忌服屋に坐して神御衣織らしめたまひし時」とある(岩波文庫『古事記』、一九六三年。三九頁)。
- (86) 『日本書紀』神代上第五段に「(天照大神)又口の裏に蚕を含みて、便ち糸抽くこと得たり。此より始めて養蚕の道有り」とある(岩波文庫『日本書紀』(一)、一九九四年。六〇頁)。
- (87) 西宮一民氏は天照大神は、「神に捧げる御衣を織る「服織女」の性格を表象するものである」とされる(同氏注10前掲書三五七頁)。
- (88) 小南一郎氏前掲注18・62書(牽牛織女の物語り「七夕と西王母」)によれば、天漢での牽牛と織姫の会合譚の成立は『詩経』の時代にまでさかのぼるが、それが七月七日の事と知られるのは後漢時代末の崔寔『四民月令』である。「博物志」「漢武故事」はそれに少し遅れる成立であり、西王母譚が遅れて七夕譚に近接していく。
- (89) 仁海『小野六帖』(『大正新脩大藏經』七八卷No.2473、100b06~100b18)。
- (90) 小島憲之氏『懐風藻』補注八五「青鳥」(日本古典文学大系六九、岩波書店、一九六四年)一四五頁。
- (91) 吉野圭南氏「七夕における西王母と王子喬―大江以言「七夕陪秘書閣、同賦織女雲為衣、応製」詩序をめぐって―」、『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要』一七号、二〇一八年。
- (92) 上田正昭氏『古代の道教と朝鮮文化』(人文書院、一九八九年)によれば、高句麗徳興里古墳(永樂一八年(四〇九))に描かれる七夕図の織女の髪には「玉勝」らしきものがさされている。なおこの織女は黒犬を引き連れている。
- (93) 『本草和名』(延喜十八年(九一八)頃、深根輔仁撰)に「牽牛子 和名阿佐加保」とある。
- (94) 『万葉集』中に、高天原安の川と天の川(天漢)が習合して詠われる例は、十一二〇〇〇、二〇〇二、二〇三三、十八―四一二五―四二二七など。
- (95) 佐竹昭広氏・山田英雄氏・工藤力男氏・大谷雅夫氏・山崎福之氏校注
- (96) 『万葉集』(四)(岩波文庫、二〇一四年)三六三頁に詳細な解説がある。
- (97) 一海知義氏注『陶淵明』(中国詩人選集第四巻、岩波書店、一九五八年)に拠る。
- (98) 伊藤大輔氏『肖像画の時代』(名古屋大学出版会、二〇一一年)三七頁。読みは、一海氏注(注93書)による。
- (99) 『倭名類聚抄』(九三二―九三八頃、源順撰)に「牽牛 爾雅註云牽牛一名河鼓 和名以奴加比保之」とある(『古事類苑』に拠る)。
- (100) 『日本国現報善悪靈異記』上縁五説話。聖徳太子が金山(五台山)で行基に出会い、後に東大寺を創建する。
- (101) 小山清男氏「斜投象の合成による絵画空間―浄土図の図像学的考察―」、『女子美術大学紀要』二〇号、一九九〇年。
- (102) 面出和子「信貴山縁起絵巻」における空間表現について、『女子美術大学紀要』二五号、一九九五年。
- (103) 太田博太郎氏「金堂」解説、『奈良六大寺大観』第九巻東大寺一、岩波書店、一九七〇年。
- (104) 福山敏男氏「東大寺大仏殿の第一期形態」(『寺院建築の研究』中、中央公論美術出版、一九八二年(一九五二年初出))三八頁。
- (105) 注2拙稿。
- (106) 三田覚之氏の指摘。
- (107) 注100の福山敏男氏「東大寺大仏殿の第一期形態」五六頁の追記。
- (108) 横内裕人氏「南都と密教―東大寺廬遮那大仏の変奏」、『国文学―解釈と教材の研究』四五巻一二号、二〇〇〇年。
- (109) 前記した論文の他に、
- (110) 齋木涼子氏「後七日御修法と「玉体安穩」―十一・十二世紀における展開―」、『南都仏教』九〇号、二〇〇七年
- (111) 同氏「仏教的天皇像と神仏習合―仁寿殿観音像・即位灌頂―」、『ヒストリア』二一九号、二〇一〇年。
- (112) 同氏「東大寺僧の伊勢神宮参詣―その歴史的背景―」、『東大寺の新研究二歴史のなかの東大寺』、法蔵館、二〇一七年。
- (113) 『隨心院聖教類の研究』(隨心院監修隨心院聖教類綜合調査団編集、汲古書院発行、一九九五年)に影印がある。
- (114) 注105の齋木涼子氏「仏教的天皇像と神仏習合―仁寿殿観音像・即位灌頂―」。

- (108) 伊藤聡氏「天照大神・観音同体説の発生」、『中世天照大神信仰の研究』、法蔵館、二〇一一年。一九九六年初出。
- (109) 後藤昭雄氏・池上洵一氏・山根對助氏校注『江談抄』(新日本古典文学大系三二、岩波書店、一九九七年)による。
- (110) 『明文抄』(『続群書類従』第三〇輯下)は、藤原孝範編、鎌倉初期成立。
- (111) 川端善明氏・荒木浩氏校注『古事談 続古事談』(新日本古典文学大系四一、岩波書店、二〇〇五年)の脚注(五〇一頁)に従う。
- (112) 『法隆寺東院縁起』に、行信が夢殿に「聖徳太子」御影救世観音像を安置したとある。その像は『東院資財帳』に「上宮王等身観世音菩薩木像一軀金箔押」である。なお『上宮聖徳太子伝補闕記』や『聖徳太子伝暦』にも、救世観音が聖徳太子の謂であることが記されている。
- (113) 『東要記』(『続群書類従』第二六輯下)は、大治二年(一一二七)頃書写の東寺真言宗の記録。記事内容は承和十年(八四三)から大治二年(一一二七)の間。勸修寺流藤原氏の寛信(勸修寺法務、後の東大寺別当)を撰者と推定する説がある。
- 湯浅吉美氏「東寺観智院金剛蔵『東要記』(一〇八箱六号)調査報告」、『成田山仏教研究所紀要』第四〇号、二〇一七年。
- 西弥生氏「東寺一門像の形成過程―『東要記』を中心に―」、『日本歴史』八三三号、二〇一七年。
- (114) 拙稿「信貴山縁起絵巻とその制作背景」、『国宝信貴山縁起絵巻』(展覧会カタログ)、石川県立美術館、二〇〇六年。及び、注2拙稿。
- (115) 拙稿「中世の造形と太子―太子信仰と毘沙門天信仰の接点」(『法隆寺史上―古代・中世―)、法隆寺編、思文閣出版、二〇一八年。
- (116) 保立道久氏『黄金国家』、青木書店、二〇〇四年。
- (117) 板倉聖哲氏「日月と素材の関わりについて―金日・銀月の淵源を求めて―」、『美術史論叢』九号、一九九三年。
- (118) 『平安私家集』(新日本古典文学大系二八、岩波書店、一九九四年)による。
- (119) 関根慶子氏『散木奇歌集集注篇』上卷(風間書房、一九九二年)による。
- (120) 堀淳一氏「鏡に見ゆる影―光源氏と紫上の人物造型と「百鍊鏡」―」、『文芸研究』一二九号、一九九二年。
- (121) 高木正一氏注『白居易』上(中国詩人選集一二、岩波書店、一九五八年)による。
- (122) 平安時代の宇多法皇、円融院、後白河法皇も東大寺で受戒しているが、五月五日受戒は鳥羽天皇のみであり、重要なキーワード的暦日である。注2拙稿一四八頁。
- (123) 前記したように西王母は紫雲の車に乗り漢武を訪ねる(『博物志』、『漢武故事』)。
- (124) 江侍従(大江匡衡と赤染衛門の女子)の和歌に「陽明門院(禎子内親王)、はじめて后にた、せ給けるを聞きて 紫の雲のよそなる身なれども立つと聞くこそうれしかりけれ」(『後拾遺和歌集』四六〇)がある。紫の雲は皇后の異称。禎子立后は、長元十年(一一三三)。またこれより早い『枕草子』にも「紫だちたる雲」があり、中宮の暗喩とされる(山本淳子氏『枕草子のたくらみ』(朝日選書九五七、二〇一七年)の二六頁)。
- (125) 中原広俊(一〇六二?)の漢詩「初夏雨中即時」に、「翅重鳥帰新樹朶」とあり雁とみる。
- (126) 西口順子氏「磯長太子廟とその周辺」、『仏教文化研究所研究紀要』一、号、一九八一年。
- (127) 吉原浩人氏「善光寺如来と聖徳太子の消息往返をめぐって」、『佛教文化研究』四九号、二〇〇五年。
- (128) 注2拙稿の注69で石井公成氏と新川登龜男氏の御説をあげた。
- (129) 「勸修寺文書」(『大日本仏教全書』寺誌叢書三)。また菅原淳茂作「醍醐天皇奉為母后胤子祈冥福御願文」には、この法要の意味づけが述べられている。拙稿「勸修寺繡帳」覚書―法隆寺金堂壁画と聖徳太子信仰の接点を求める―(『聖徳』二三三三号、二〇一七年)乞参照。
- (130) 『梁塵秘抄』(新日本古典文学大系五六、小林芳規氏・武石彰夫氏・土井洋一氏・真鍋昌弘氏・橋本朝生氏校注『梁塵秘抄 閑吟集 狂言歌謡』、岩波書店、一九九三年)一三三番歌「須弥の峰には堂立てり、名をば善法弥陀の堂、蓮華や后の一の願、其の日の講師は釈迦仏」と脚注参照。
- (131) 法隆寺の厨子入阿弥陀五尊像や、橘夫人阿弥陀三尊像厨子は切利天上の阿弥陀如来を表すと思う。また勸修寺御願堂には「金色阿弥陀三尊三体 四天王四体 在厨子内」とある根本仏があったが(『勸修寺文書』、『大日本仏教全書』寺誌叢書三二)、醍醐天皇母胤子にちなむ切利天宮殿像であったか。

- (132) 『過去現在因果経』(『大正新脩大藏経』三卷No.0189) 653a08～653a11。
『大智度論』(『大正新脩大藏経』二五卷No.1509) 92a07。
- (133) 浅井和春氏「飛鳥・奈良の仏教美術と律令国家」、『律令国家と天平文化』、吉川弘文館、二〇〇二年。文意を採り前後の文章をつないだ。
- (134) 毘沙門天と聖徳太子の習合は注2拙稿で考察した。
- (135) 平安後期の天皇が金輪聖王(転輪聖王)と称されたことについては左記の論文がある。
- 上川通夫氏『日本中世仏教形成史論』第二部第三章、校倉書房、二〇〇七年。
- 稻城正己氏「大江匡房の願文と転輪聖王」、『宗教研究』七九巻四号、二〇〇六年。
- 稻城正己氏「八〇九世紀の經典書写と転輪聖王観」、『元興寺文化財研究所創立四〇周年記念論文集』、二〇〇七年。
- 斎木涼子氏「中世的天皇像の形成―仏教・神祇と金輪聖王」、『歴史の理論と教育』一三九号、二〇一三年。
- (136) 隴谷寿氏『堀河天皇吟抄』(ミネルヴァ書房、二〇一四年) 六五頁～六八頁。
- (137) 『台記』康治元年(一一四二)五月十六日条。また隴谷寿氏右書の七一頁。
- (138) 『百鍊抄』建久五年(一一九四)二月十四日条。また注111川端善明氏、荒木浩氏校注『古事談 続古事談』の脚注(六〇九頁)。
- (139) 中村一郎氏「国忌の廃置について」、『書陵部紀要』二号、一九五二年。
- (140) 南嶽慧思『立誓願文』(『大正新脩大藏経』四六巻No.1933) 786b28。「七月七日入胎」は、結局七夕に由来するか。
- (141) 摩耶夫人は「神母」(『長阿含経』など)である。早くは元正天皇が「神母」とされている。
- 東野治之氏「元正天皇と赤漆文櫛木厨子」、『日本古代史料学』、岩波書店、二〇〇五年。
- (142) 藤原敦光作願文がある。「鳥羽院奉為贈皇后被供養五部大乘経」(『本朝文粹』卷第十三、『国史大系』二九下、二二二頁)
- (143) 藤原永範作願文がある。「鳥羽天皇奉為贈皇后修法華八講御願文」(『本朝文集』卷第六十、『国史大系』三〇、二八八頁)
- 井原今朝男氏「中世禁裏の宸筆御八講をめぐる諸問題と『久安四年宸筆御八講記』」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第一六〇集、二〇一〇年。
- (144) ②図は大きさは異なるが、比例的に縮小されていることに違いはなく別様ではない。例外的な縮小が、遠景効果となる。
- (145) 谷口鉄雄氏「信貴山縁起絵巻に於ける同一構図の反復について」(『東洋美術論考』、中央公論美術出版、一九七三年。一九四四年初出)は、はやくこの反復表現に注目された。
- (146) 主として注55高田真治氏・後藤基巳氏訳『易経』による。ほかに、鈴木由次郎氏著『易経』(集英社、一九七四年)、今井宇三郎氏著『易経』(明治書院、一九九三年)などによる。
- (147) 『中庸』第一章に「喜怒哀楽の未だ発せざる、これを中と謂う。発して皆節に中る、これを和と謂う。中なる者は天下の大本なり。和なる者は天下の達道なり。中和を致して、天地位し、万物育す」とある(金谷治氏訳注『大学・中庸』、岩波文庫、一九九八年)。
- (148) 注146の鈴木由次郎氏著書(上) 一九頁。
- (149) 注146の今井宇三郎氏著書(上) 二二頁。
- (150) 注115拙稿「中世の造形と太子―太子信仰と鎌倉時代絵画(その三)」。
- (151) 白畑よし氏『物語絵巻』(日本の美術四九号、至文堂、一九七〇年) 二三四頁。
- (152) 大崎聡子氏「禅林寺蔵「山越阿弥陀図」研究」、『美術史学』四一号、二〇二〇年。
- (153) 石田実洋氏「阪本龍門文庫所蔵『東大寺御受戒記』附・宮内庁書陵部所蔵『東大寺御受戒記次第』」、『戒律文化』二号、二〇〇三年。
- (154) 注146の鈴木由次郎氏著書(下) 二四九頁。
- (付記) 『大正新脩大藏経』の検索は、S A T大藏経テキストデータベースを利用しました。記して感謝申しあげます。
- (かじたに りょうじ/奈良国立博物館名誉館員)

③その他

- ・奈良県文化財保護審議委員
- ・南京大学繆斯基基金芸術顧問

奈良国立博物館研究紀要

鹿園雑集

第二十四号

令和四年三月三十一日発行

編集発行 奈良国立博物館

〒630・8223

奈良市登大路町五〇番地

印刷・製本

株式会社天理時報社
天理市稲葉町八〇番地